

蜜柑とユウウツく茨木のり子異聞く

長田育恵

【登場人物】

ノリコ 詩人 茨木のり子の「気掛かり」

有田 紀子(きいこ) のり子と同日に亡くなった「のりこ」

仲村 典子(テンコ) のり子と同日に亡くなった「のりこ」

岸田 葉子 詩人・「權」同人

吹抜 保 蜜柑の樹

喜多川 俊一 出版社「青嵐舎」社長

宮本 浩二 のり子の甥

三浦 安生 のり子の夫

川崎 洋 詩人・「權」同人

谷川 俊太郎 詩人・「權」同人

金子 光晴 詩人

一、原稿

二〇〇六年六月の午後。のり子の死後およそ四ヶ月後。東京、東伏見。茨木のり子邸、二階の居間。

(一階部分に玄関ポーチ・玄関・浴室・洗面所などがある)

一階から上がってくる階段、書斎・寝室に通じるドア。

居間の奥は、カウンター越しに台所となっている。

居間にはダイニングテーブル、ソファとローテーブルがある。

ローテーブルの近くにはスウェーデン製の椅子が一脚。詩『倚りかからず』に登場した、あの椅子である(安生の椅子)。

椅子の近くには簡素なオーディオセットと何冊かの本。

壁には、男物のレインコートが掛けられている。

居間に窓。庭に面し、いっぱい蜜柑の木。

葉が生い茂っているが花は今は一つも咲いていない。

外光がふんだんに差し込んでくる部屋。

だが今は窓はカーテンが閉じられている。

ダイニングテーブルには、のり子が愛用していた眼鏡。

台所から出てきた保、ダイニングテーブルで珈琲を淹れる準備をする。

保

(書斎に) ノリちゃん。珈琲淹れるけど。——来ないか？

と、玄関の鍵が開き、ドアが開く音。

保、珈琲を淹れる手を止める。

保

——(書斎に) いいよ、俺が出る。

保、玄関への階段を降りていく。

浩二(声)

どうぞ。上がってください。

喜多川(声)

失礼します。

浩二(声)

今、電気点けますから。

階段フロアが明るくなる。

浩二、階段を上がって入ってくる。

シンとした居間を見渡す。

居間の電気を点ける。

続いて、喜多川も来る。人の気配のない居間に呼びかける。

喜多川

のり子さん。来ました。喜多川です……。

浩二

窓開けますね。

浩二、部屋のカーテンを開け、窓を開ける。

明るい外光や外の気配が部屋いっぱいに入ってくる。

喜多川 ——ここへ最初に来たときは、まだ駆け出しでね。
浩二 はい、
喜多川 今でこそ出版社なんて言ってるけど当時はただの印刷屋。出版の経験もないのに押しかけて。いつか、あなたのものを出させてください。

保、戻ってくる。客用のカップを足し、珈琲を淹れる続きを。

保 強引だったな、あんたは。

喜多川 まあ、強引でした。でもそうさせるものがあつた。のり子さんが出て、戦争中に青春時代を過ごした女性が、なにを考えていたかがスキッと分かつた。ああいう本を出すことこそ活字に関わる者の使命なんじゃないかって。それで、売れなくても構いません、失敬、倒産だって覚悟の上、その証拠に僕は結婚しません、え？

浩二 泣かせる女房子供がいなけりや恐いものはないだろう？

浩二 じゃあ喜多川さんは。

喜多川 ……翌年に結婚。会社の事務員と。

浩二 なんだ。

喜多川 それものり子さんのせいです。——あの日、決意を述べる僕に、のり子さんがご馳走してくださつた。あのテーブルに花が一輪生けられて。前掛けをしたのり子さんがコトリ、親子丼。——帰りには嫁さん探そうって思つてましたね。

浩二 ハヤシライスです。俺は。

浩二 ほう、

浩二 結婚する前に彼女をここへ連れてきて。伯母のお眼鏡に適うかもそうです
が、なにより彼女に見ておいてほしくて。理想の食卓。

喜多川 ああ……、

喜多川 伯母のハヤシライス、今でも食いたくなるんです。

浩二 うん……うん……、

浩二 ——ありがとうございます。伯母のことそこまで思ってくださいって。

喜多川 お礼を言うのはこちらだよ。のり子さんの詩と出会わなければ、今の僕は
なかった。

浩二 俺も、この四ヶ月、やっと伯母のものを全部読みました。これまでは、俺
にとつて伯母は親戚のおばさんでしかなかったんです。でも亡くなつて、
喜多川さんのような方がいらして、はじめて伯母がどういう人か分かっ
た。

保、珈琲を淹れる。

喜多川 「食卓に珈琲の匂い流れ」。

浩二 第七詩集ですね。

喜多川 ああ。よく珈琲も淹れてくださった！そこらの喫茶店じゃ味わえない、僕
なんて珈琲飲みたいばかりに……、

浩二 はい……、

喜多川 今だって匂いがするじゃないか？ネスカフェの。
保 キリマンジャロだよ。
喜多川 壁に染みついてるんだな。ほら、珈琲色。
保 ヤニだよ。
浩二 壁は煙草でしょう。伯母は何度言ってもやめませんでしたから。
喜多川 そうだった……そうだったね……。畜生。ほんとに飲みたくなってきた。

保、浩二と喜多川に珈琲を注ぐ。

保 飲めよ。違いが分かる味だ。
浩二 どうぞ。これで良かったら。

浩二、鞆から缶コーヒーを二つ出す。

喜多川 ……いただくよ。ありがとう。
保 おい。

浩二・喜多川、ダイニングテーブルで缶コーヒーを飲む。

喜多川 旨い。
保 ……(舌打ち)。
喜多川 (くしゃみ)
浩二 風邪ですか？
喜多川 いや……、

浩二、窓を閉める。
保、自分のカップに珈琲を注ぎ、安生の椅子で飲む。

浩二 すいません、今日は。
喜多川 とんでもない。浩二くんの呼び出しならいつだって。——で、あれか。
浩二 ……ええ、
喜多川 見つけたのかい？
浩二 ……はあ。
喜多川 歯切れが悪いね。
浩二 その、どうお話ししたら。喜多川さん——伯母は本当に未発表の原稿と言
ってたんですよね？

喜多川 ああ、そうだよ。のり子さん、こう仰ってたんだ——「いまちよつとした
ものを書いているの。けど出すのはわたしが死んだ後にしてね」って。
浩二 でも、お話ししたように、伯母は、俺にはなにも言っただけです。
東京のこの家に入りしめたのは親族じゃ俺ひとりです。だから、息子の
ようになんて言ったらあれですけど、伯母だって俺のことをそういうふう
に見ていたはずですよ。つまり、そんなものがあるとして、俺に一言もない
というのはいま、
喜多川 まだ時間はあると思ってたんだよ。

浩二 七九ですよ。……意識はしていたはずです。
喜多川 でも、きみはお医者さんだし、こういつちやなんだが、出版だの文学だのは専門外だろう？

浩二 確かに俺は門外漢です。でもこうなった以上、伯母が書いた物はちゃんと管理していくつもりです。

喜多川 浩二くん。なにを見つけたか知らんが、のり子さんはこういう事で冗談を言う人じゃない。もし本当にのり子さんの未発表原稿があれば、詩集『倚りかからず』の次の純粹作品だ——詩人 茨木のり子が最後に達した境地！出版社生命を賭けてもいい。とにかく、読ませてくれないか？

浩二 ——そうですね。見て貰うのが早いと思います。どうぞご自身で確かめてください。

浩二、書齋に入り、クラフトボックスを取ってくる。

喜多川 おお……！

浩二 本棚の隅にありました。

喜多川 ——拝見。

喜多川、震える手で箱を開ける。

喜多川 浩二くん、これは……、

喜多川、箱の中から切り抜きや紙片を取り出す。

浩二 ……ええ、ペ・ヨンジュンです。

喜多川 原稿。原稿は……！

浩二 一番下に。

喜多川 ああ……！

浩二 感想文です。冬ソナの。

喜多川 ああ……、他には。

浩二 ——、

喜多川、箱の中のすべてをひっくり返してみる。

が、他に原稿用紙らしきものは見当たらない。

喜多川 ——別な原稿は？浩二くん。いくらなんでもこれじゃ、

浩二 俺だって確かめました！探したんですこれでも——でもどこにも！

喜多川 じゃあ、貸金庫——そうだよ、番号とか、そういうものは？

浩二 聞いたことありません。

喜多川 じゃあ、誰かに預けてあるとか。詩人仲間の誰か——住所録、

浩二 住所録の皆さんにはお別れの手紙を出しました。もし誰か何かを預かって

たら、手紙を受け取れば申し出るでしょう？

喜多川 ——じゃあ……じゃあ、

浩二 喜多川さん！何度も言いますが、伯母は、俺には何も言っていなかったんで

喜多川
保
す。……これは確かなことだと思えます。原稿はないんです。伯母はなにも残さなかった。死ぬ前に書いておいたお別れの手紙、それ以外は。そんなはずはない。詩人茨木のり子が編集者である僕に言ったんだ。あの人が原稿があると云ったら必ず在る。在るんだよ。客だよ。

チャイムの音。

浩二
——俺の言葉で足りなければ聞いてみてください。証人がいらつしやいませから。

喜多川
証人？
浩二
ええ。

浩二、玄関へ立っていく。

保、ダイニングテーブルへ行き、切り抜きや紙片を片付ける。

喜多川、原稿を取り、むさぼるように読みはじめる。

保が片付けているのには、注意は払わない。

喜多川
（読み終わり、深い溜息）はああ——。

保
いいよな。

喜多川
でも……冬ソナかあ……！

浩二（声）
足もとお気をつけください。

葉子（声）
大丈夫よ、

浩二、年老いた岸田葉子を伴って入ってくる。

喜多川、その姿を見て、立ち上がる。

浩二
岸田さんです。

喜多川
葉子さん、——ご無沙汰しております。

保
誰かと思えば。いらつしやい。

葉子
……ごめんなさい、お名前が。

喜多川
青嵐舎です。青嵐舎の喜多川です。

葉子
ああ。喜多川さんね。そうでした。

喜多川
お元気そうで。

保
変わらないな。

葉子
馬鹿言わないで。もういい年よ。次はわたしの番。

保・喜多川
そんな、

喜多川
仰らないでくださいよ。

葉子
甥御さんでしたわね。ごめんなさいね、今日は無理言つて。

浩二
いえ。

葉子
たまに東京に出てきたものだから。どうしても一言いつてやりたくて。——

例の手紙ね、ひと月も経ってから読んだのよ。ちよつと家を空けてたものだから。帰ってきて郵便受け開けたら、のり子さん、もうこの世からオサラバしてた。

喜多川 ああ……、
葉子 ふらっと消えるのは、いつだってわたしの方だったのに。
浩二 伯母も、ほんとうはもっとゆっくり皆さんにお別れをしたかったと思いま
すが。
葉子 馬鹿よ。あのひと昔から自分で言っていたのよ。年取ったら絶対うちの階段
で転んで頭打つわって。
浩二 郵便を取りに外に出たんです。戻ってきて階段を上る時に、頭の中の血
管が。
保 二月でね。寒かったから。
浩二 でも落ちた後も、自分でベッドまで行ったんですよ。ベッドに入って、布
団ちゃんと肩まで掛けて。——見つけたときは、ぐっすり眠ってるよう
でした。夢でも見てるみたいに。
喜多川 本当にもう。救急車さえ呼んでくだされば。
葉子 嫌い。あのひとのそういうところ。迷惑なんて掛けりやいのよ。最後まで
い。パーッと。オフイリアみたいに。
喜多川・浩二 ……、
葉子 咲いてたらよかったのに。
浩二 え？
葉子 その蜜柑の木。
浩二 ああ……、
葉子 今頃は咲いてたじゃない？ 白い花がぶわっと。
喜多川 本当だ。もう六月なのに。
浩二 あれなんですかね。世話する人がいないと……。
保 そういや葉子ちゃん、昔、描いてくれたよな？
葉子 そうよ、絵を描いたの昔……。——やっぱり、来るんじゃないか。
浩二 岸田さん、
葉子 あーあ。せっかくお葬式やらないでくれたのに。わたし、それだけはのり
子さん褒めたげようと思ってたのよ。オサラバの手紙、気が利いてたわっ
て。
浩二 ——ええ、
葉子 一服だけさせて。そうしたら帰るわ。
浩二 ……ごゆっくりなさってください。
喜多川 葉子さん。すいません——こんな時ですが。
葉子 なあに？
喜多川 ご存じでしたら教えていただきたくて。その——のり子さんからなにか聞
かれたことはありませんか？
葉子 何かって？
原稿——原稿について。
喜多川 あの……ゆうべお電話で伺った、
葉子 ああ。なんか書いてるって話？
喜多川 はい！
でも、出版の意思はなかったんじゃないかしら？ 今書いてるものは、自分
だけのものだからって。
喜多川 仰ってたんですか？ のり子さんが？

葉子 正月あけかな、電話で。これについては誰の批判も受けたくないからつて。

浩二 ……お聞きの通りです。

喜多川 でも——浩二くん。のり子さんは僕には確かに、

葉子 ところで、あなたは？

喜多川 はい？

葉子 どなただったかしら？

保 旧い知り合いです。

葉子 そ。——書斎、よろしい？

浩二 どうぞ。

葉子、書斎に入っていく。

喜多川 なあ……、

浩二 はい……、

喜多川 どなたって。——大丈夫か？葉子さん。

浩二 影が薄いんじゃない、

喜多川 誰が？僕が？馬鹿言うなよ。葉子さんあ見えて——あれなんじゃ、ほら、家空けてたって、入院じゃないのか？原稿の話も思い違いかもしれない。

浩二 喜多川さん、

喜多川 頼むから僕の手で探させてくれ——頼むよ！

書斎から葉子が机を叩く音。

喜多川と浩二、ギョツとする。

書斎からの音、次第に強くなる。

浩二 ……岸田さん、

浩二、喜多川、葉子を気遣い、書斎に入っていく。

書斎からノリコが現れる。

ノリコ ねえ。泣いてるよ。女の人が。

保 うん。

ノリコ どうして？

保 あなたがいなくなったからね。ノリコさん。

二、三人のノリコ

ノリコ、ダイニングテーブルを挟み、保と向かいあう。

保、ノリコのカップを用意し、珈琲を注ぐ。

ノリコ 私がいなくなった？——何言ってるの？

保 どうぞ。冷めるよ。

ノリコ　――、あんた誰よ。人の家で何やってるの？
保　管理人だよ、俺は。
ノリコ　……管理人？
保　この家を守ってる。あなたがいなくなってから。
ノリコ　いるじゃない……私……、
保　いいや、もういない。のりさんは亡くなったんだ。
ノリコ　ここにいるわよ！
保　じゃあ証明してくれ。あなたが生きてるって。
ノリコ　――なにを、……証明？（笑う）
保　さあ。

ノリコ、書斎へ行く。

ノリコ（声）　ねえ、――ちよつとすいません。すいませんけど。

ノリコ、戻ってくる。

ノリコ　からかつてる？みんな仲間でしょう？

保、居間の引き出しから手鏡を出して渡す。

ノリコ　何よ。
保　……、

ノリコ、鏡を見る。袖でよく拭いてもう一度見る。

ノリコ　――ッ！

ノリコ、階下の洗面所に慌てていく。やがて戻ってくる。

保　洗面所の鏡には映ったかい？

ノリコ　――、何が目的？

保　は？

ノリコ　そうよ、こないた、

保　「こないたすら。なにかしたんでしょう？」。悪いけどしてないよ。

ノリコ　冗談、

保　冗談でもない。

ノリコ　……、

ノリコ、電話に飛びつく。やみくもにダイヤルを回す。

どこかにつながるのを、ノリコ、祈るように待つ。

典子（声）　「はい、もしもし？」
ノリコ　（電話に）もしもし。もしもし？

窓枠から典子が顔を出す。

典子
なんてね。

ノリコ
(叫ぶ) ……なんで、二階よ！

食器棚の奥から紀子が顔を出す。

紀子
羨ましいわ〜フレッシュで。毎度毎度その反応。

ノリコ
なんで壁から！？——何なの、あんたたち！

紀子
何って。ねえ？

紀子・典子
(うらめしやく)

ノリコ
(叫ぶ)

典子
あんたもでしょうが。

紀子
やあね、カマトトぶって。

紀子と典子、ダイニングテーブルに座る。ノリコ怯えている。

紀子
お茶の時間には間に合ったかしら？

保
ええ。いつも通り。

典子
この人の反応もいつも通り。座んなさいよ。

保、紀子と典子に珈琲を出す。

紀子と典子、持参のお茶請けも用意する。

典子
は〜、今日もいい香り。

紀子
で？終わった？一通り？

保
まだです、あとひとつ、

ノリコ、玄関に向かって階下へ降りていく。

ドアを叩く音。

ノリコ(声)
——た、たた……、助けてー！誰かーッ！

典子
はい一通り。

紀子と典子、美味しそうに珈琲を飲む。

ノリコ、戻ってくる。

ノリコ
——ッ、

紀子
どう？外に出られた？

ノリコ
——どうなってるの？

典子
だから、聞いたでしょ？あんたは亡くなったって。受け入れなさい。

ノリコ
……信じられない、亡くなったのにここにいる？

紀子
この世に未練でもあるんじゃない？

典子　ネクラねえ。
保　テンコさん。——忘れ物があるんだよ。
ノリコ　……忘れ物？
保　飲んだら？落ち着くよ。
ノリコ　……にが。
保　のりさんは好きだったんだよ、それが。
ノリコ　——、苦いのよ。牛乳ない？

保、牛乳を取りに行く。

保　——四ヶ月前のあの日。本当ならのりさんは旅立つはずだった。悔いなんて何一つ残さずに。でもあの日の、5時23分。のりさんの意識が遠のく真際、何かがふっと気に掛かった。体から抜け出した小さな気掛かり。それがノリちゃん、あなただ。
ノリコ　……は？

保　気掛かりはさっさと片付けてすぐに後を追うはずだった。でもなぜか、ノリちゃんはここに留まった。それからずっとノリちゃんは「あの日」を繰り返してる。
ノリコ　え？どういうこと？

保　ノリちゃんが外に出られるのはたった一度——あの日の、のりさんと同じように夕方郵便を取りに出て、戻って——眠りに就く。そして、目覚めてはまた繰り返す。同じ一日を。
典子　つまりあんたはのりさんの置いてけぼり。
ノリコ　鳥のフン。
典子　……待ってよ、
典子　現実を受け入れなさい。いい？これが本物ののり子さん。

典子、写真立てを取ってきて、のり子の写真を見せる。

ノリコ　きれいな人。これが私……宝塚の男役みたい！

典子　本人はね。あんたは出廻らし。
紀子　味噌っかす。

ノリコ　ひどい。

典子　気掛かりがあるんでしょ？さっさと思い出せば自由になるのよ。
ノリコ　急に言われたって……、気掛かりって何？

保　それはノリちゃん自身が思い出すしかないんだ。

典子　あんたはどんだんのり子さんだった頃の記憶が薄れてるのよ。
ノリコ　……、
保　このままだとなんのためにここへ残ったのか、忘れ物がなんだったか、完全に忘れてしまう。

ノリコ　……そしたら？

保　永久にどこへも行けなくなる……。自分が誰だったかも忘れて。

ノリコ　イヤー！

保　だからノリちゃん、その前に思い出すんだ。きいこさんもテンコさんも助

けてくれる。

ノリコ ——きいこさん……？テンコさん……？

典子 これもご縁っていうのかしらね。あたしたちはさ、三人ともノリコなのよ。

ノリコ え？

紀子 しかも同じ日の同じ時間にポックリ逝った——あたしは有田紀子。糸偏に己で、紀子様とおなじ字ね。

典子 で、きいちゃん。あたしは仲村典子。辞典の典の字を書くの。

紀子 だから、テンコ。ちなみにあんたのことは「キガカリ」って呼ぶから。

ノリコ えー？！

紀子 分かりやすいでしょ？「キガカリ」！

典子 あたしたちはさ、珈琲に呼ばれたの。死んでフラフラしてたら匂いがして！

紀子 あたしたちでも飲める珈琲。あの座敷童が。

保 座敷童？！

紀子 違った。座敷オヤジ？この家に憑いてるんでしょ？

保 管理人と呼んでくれ。

典子 とにかく、それから毎日午後はこちら。ほら、お線香ばつかだと辛気くさい

ノリコ じゃない？

紀子 じゃああなたたちも——何か気掛かりがあるの？

ノリコ 違うわよ。あたしたちにはそんなものないわよ。生まれ変わりの順番を待ってるの。

ノリコ 生まれ変わりの順番……？

紀子 あたしたち、この魂ってもんはさ、はっきり言って死んだくらいじゃ消えないのね。自分で、やりきったーって思うと光に溶けて、また生まれ変わるんだけど。でもあたしたち、自分じゃ次何に生まれるか、決められないのよ。人間で生まれてないーって思ってもさ、前の人生でいいこと、徳っていうの？そういうの積んでないとランク下げられちゃうわけ。

ノリコ そうなの……？

典子 あんたもちゃんと死んだら分かるわよ。

紀子 あたしだって生きてる間は忘れてたけど、死んだらバツと思いついたもん。あたし、紀子の前は男だったの。

ノリコ へえ？

紀子 フランス人。で、その前はヤモリだったのね。

ノリコ ヤモリ？！

紀子 そう。すごい大変だった、いっつも隠れてて。あの苦労は、ちよつともうナイなあ……、

ノリコ ……へえ……、

典子 あたしもやつと人間になれたときは嬉しかったなあ。ま、はじめてなった時は散々だったけど。

ノリコ そういふもの？

典子 当たり前でしょ？そんな、いきなり人間になってうまくやれると思ってる？ほら、十代で芥川賞とったりする子いるじゃない。ああいう子は、あれよ、人間やるの百回目とかだから。

ノリコ

そうなんだ！

典子 あたしはね、きいちゃんと違って、もう何回かは続けて人間やってるの。けど、こないだの人生はなんていうか、慣れてるあたしでもうまくいかなくてさ。今、生まれ変わりのルートに乗っちゃったら間違いなく次はイカになっちゃいそうで。

ノリコ

イカ？

典子

百歩譲ってイカはいいとして、

ノリコ

いいんだ。

典子

さすがにダンゴムシとか。

紀子

まあだから。今からでもせいぜい、その——徳ってやつを積んで？そしたらちよつとは挽回できるかなあ。

典子・紀子

ねエ。

保

いじましいね。

典子

いじらしいって言ってちょうだい。

紀子

だからあたしたち、あんたを手伝うのよ。ね、タモツちゃん？

ノリコ

——タモツちゃん、

典子

吹抜 保。

紀子

変な名前よね。風通しいんだか悪いんだか。

ノリコ

(頷く)

保

俺は気に入ってるけどな。あなたがくれた名前だからね。

ノリコ

——え？(保を見つめる)

保

ノリちゃんが忘れても俺は憶えてる。子供の頃からのつきあいだからね。

ノリコ

幼馴染み？

保

似たようなもんだな。

ノリコ

——ごめんなさい。思い出せない……、

保

いいんだ。俺はね、ノリちゃん、のり子さんには感謝してるんだ。ここで

ノリコ

こうしてるのも全部のり子さんのおかげなんだ。だから、のりさんの最後の望みは俺がきつと叶える。心配しないで。

ノリコ

……うん、

紀子

あたしたちも協力するから。今日こそ思い出せるように。

ノリコ

……ありがとう。がんばるから。

典子

……ね。昨日も言ってたけどね。

保

今日は昨日までとは違うんだ。お客が来てるからね。

典子・紀子

嘘、誰か来てんの？

保が書斎を示し、典子、様子を窺う。

典子

……生きてる！

紀子

(シート)

書斎から、葉子・浩二・喜多川が出てくる。

ノリコたち、凍りついたように様子を見る。

浩二・喜多川、葉子を労るようにソファに座らせる。

浩二 大丈夫ですか。葉子さん。

葉子 悪いわね。ただの立ちくらみ。——帰るわ。

浩二 無理しないで。ゆっくりなさってください。

喜多川 そうです。あと少し、いていただけませんか？僕がもしなにか見つけたら、一緒にお読みいただきたいんです。

浩二 喜多川さん、

喜多川 すまんが浩二くん。やっぱり僕に探させてくれ。諦めきれないんだ。

喜多川、書齋に戻っていく。

浩二 喜多川さん！——（葉子に）ちょっと失礼します。

浩二、喜多川を追って行く。

葉子 ……のり子さん、あなた本当にいなくなっちゃったの……？嫌よ、わたし——すごく嫌だ……！

典子 ——何度生まれ変わってもこれだけはね……。

紀子 あんた、幸せね。あんたのために泣いてくれてる……、

ノリコ 私の……？

ノリコ、葉子にそっと近づく。触れようと手を伸ばす。

葉子 のり子さん……？

ノリコ、恐れて手を引つ込める。

葉子 のり子さんじゃない？——いるんでしょう?! のり子さん？

紀子 時々、勘の鋭いひともいるのよ。なんかの加減で見えちゃうの。

典子 （頷く）

葉子 のり子さん！

保 葉子ちゃん、もう大丈夫だ。

保、葉子に触れる。葉子、ふっと短い眠りに落ちる。

保 この人は岸田葉子さん。のりさんの友達だった。

ノリコ 友達……、

保 若い頃からの。のり子さんには仲間がいた。詩を書く仲間が。支えてくれる編集者も。腹を空かせた甥っ子も。それから理解のある旦那さんも。

ノリコ 私——思い出したい。何が私を引き留めたのか。

保 ああ。今日こそ。5時23分が来る前に。

保、食卓の上に置かれたままの眼鏡をノリコに渡す。

ノリコ、眼鏡を掛ける。

典子、のり子が椅子に掛けたままのスカーフを渡す。

紀子、スカーフを写真の通りに結んでやる。
保・典子・紀子、ノリコの出来映えを見つめる。

紀子 やっぱり似てない。

葉子、目を覚ます。

葉子 ——ん……、のり子さん……？

声に出すが、シンとした居間。葉子、もう気配を感じない。
葉子、窓へ向かう。風を入れるように窓を開ける。

葉子 花、ほんとに遅いわね……。

ノリコ、葉子の隣に立ち、葉子の背にそっと触れる。
共に窓の外を見る。蜜柑の木に風が渡る。

三、『いちど見たもの』

一九四五年、焼け野原となった東京に人々が立つ。

保 はじまりは荒野。

紀子 ちゃんと言うなら、オギヤアと生まれたのは大正一五年の六月だけど、
典子 茨木のり子さん自身が自分で決める誕生日がいつかっていうなら、昭和二

〇年の八月十五日。

保 このあてどもなく広がる荒野の名は「戦後」——戦いの後。

保、去る。

ノリコたち、青春期の少女たちとしてそこにいる。

紀子 のりちゃん、

典子 のり子さん、生き延びたわね。

紀子 もう、のりちゃんの号令聞けないね。

ノリコ え？号令？

典子 かしらア……右イ！

ノリコ かしらア……左イ！大隊長殿に敬礼！直れ！——あ、なんで？

紀子 当たり前でしょう？あたしたち、こればかりやってたんだから。

典子 全校生徒四〇〇人がのり子さんの指揮のもと一斉に動く！爽快だったわ！

ノリコ 嘘！

典子 全校生徒の憧れ、軍国少女のまさに鑑！

紀子 胸を張りなよ。あたしも兄さんに赤紙が来たときは、真っ先におめでとう

ノリコ ございますって言ったもの。誇らしくって！

紀子・典子 あの日が来るまでは。

暗転。

ノリコ

……。

典子

なんか言ってよ……。

紀子

言って……。

ノリコ

——「あ」、

典子・紀子

あ？

ノリコ

な——なな・なんて言えばいいの？

典子

はい。

ノリコ

書いてない。

典子

ないわよ。ここまでは全部あったんだけど。間違ってたんだって。

紀子

こっから先は、自分で喋るんだって。

典子

自分で考えるんだって。

ノリコ

きゅ・きゅ——急に言われても……。

紀子

ね。

典子

あたし、もう万歳って言わなくていいわよね。一生分言ったもの。

紀子

……あたしも。もう御国の為って考えない。こんなに尽くしたのに。

典子

じゃあ、何て考えればいいの？

紀子

それは——(出てこない)、ねえ、なんか言ってよ。のりちゃん。

典子

のり子さん。

ノリコ

(疑いの中から言葉を探し)……「あ」、

典子・紀子

……「あ」？

ノリコ

あ・お・い・そ・ら。

ノリコたち、空を見上げる。

紀子

——うん。そうねえ……、

典子

青いわねえ。空！あたしたち、これからどうする？

紀子

どうしようか？のりちゃん。

ノリコ

——、

どこかから風に乗って聞こえてくるジャズ。

ノリコ

……お——お！

紀子・典子

お？

ノリコ

踊る！

紀子・典子

ちよつ、

ノリコ、もがくように踊る。紀子と典子、しゅしゅ付き合う。

三人ともぎこちなく、特に紀子と典子は文句を言っているが、

次第に楽しくなってくる。

保、国民服姿で来る。

保

のり子さん、

ノリコ はい？
保 お見合いの相手を連れてきた。
ノリコ へ？
保 純朴無垢な青年だ。だが心の中に芯がある！女房をきつと大事にするよ。
ノリコ その人は、ど・どこ？
保 ここに。

保、見合い相手の安生となる。

紀子と典子、色めき立つ。両家の立会人になる。

紀子が三浦家（安生）に、典子が宮崎家（のり子）に。

ノリコ む・むむむむ・

宮崎家（典子） のり子。はしたないですよ。

ノリコ だって私——なんにも、

宮崎家 こちらは三浦安生さん。お医者様よ。将来ご有望で、今度、東京の病院に赴任なさるの。

三浦家（紀子） 有望かどうか。まあ、とにかく一生懸命取り組むタチではありませんから。のり子さんこそ東京の学校をお出になられて。東京にも慣れてらっしゃいますわね？

宮崎家 ええ。それにこの子も医者のお家に生まれましたから、安生さんのお仕事も少しは支えて差し上げられると思いますよ。ね、のり子さん？

三浦家 のり子さん？

ノリコ も・もも——、

三浦家 桃が食べたいの？

ノリコ 申し訳ありませんが、け・けけ結婚なんて。

宮崎家 これ。のり子！

ノリコ わ・私——じじ自分のことさえ分らないんです。い・いい今までののは全部違つて、じ・自分の考えをこれから見つけなきゃならないんです。で・ですから、けけ結婚はまだ。

三浦家 話が違うじゃありませんか！

宮崎家 のり子！——すみません。この子、緊張して。

三浦家 安生さん。どうします？

安生 じ——じじ——、

宮崎家 爺なの？

安生 実はわ・わたくしも思っておりました、け・けけ結婚はまだ、話が違うじゃありませんか！どういうことですか？！

三浦家 いえ、お待ちを！——どうやら若いお二人は意見が合ったんじゃないませんか？

宮崎家 あら……、

三浦家 どうですか？ここは、お二人にお任せしたら。

宮崎家 それもそうね、

ノリコ え？

三浦家・宮崎家 オホホホホ。

ノリコ・安生 待って！

三浦家・宮崎家　ごゆっくり。オホホホ。

紀子・典子、去る。

ノリコ　あ・ああ・あのう——、
安生　ハ・ハハハ・ハイ。

のり子・安生、思わず笑いあう。

安生　——そうの。気取てもしよがね。

安生、庄内弁で話し始める。

安生　実はの、故郷のこどばでねど喋らんね。
ノリコ　クニ。

安生　山形の鶴岡。あなたどは、あど会わねながら本当のごとど話すでば。
ノリコ　俺が何かだつてだが分がつかの？

ノリコ　はい。なんだか——懐かしいです。
安生　んだでやの。あなたの亡くなつたお母様も庄内の生まれだすけ。
ノリコ　……はい、

安生　結婚のごと、あなたが嫌だどがそういうんでないなです。でも、俺は医者
どして、これがらいつぺ仕事をするつもりでいます。日本の医学はこの戦
争でずいぶん横道さ逸れました。大急ぎで軌道修正さねばなりません。今
はただ打ち込みだいなです。
ノリコ　分かります。私も——取り戻したい。

安生　何を？
ノリコ　記憶。

安生　……記憶、
ノリコ　私、大急ぎで見つけなきゃならないんです。私の——私だった頃を。自分

でちゃんと見て、考えたい。何もかもそこから始めなきゃならないんで
す。だから結婚は。
安生　……珍しいですの。あなたは。

ノリコ　はい？
安生　この国の女性達は、妻が夫さ盲目的に従うごどが当然と教えられてきた。

安生　この国の女性達は、妻が夫さ盲目的に従うごどが当然と教えられてきた。
ノリコ　むろんそこが反発した女性達はいる。んでも女性自身が望んでそこさ甘

んじできたのも事実です。——自分の目で見て考えるなんて面倒くせ。
安生　私は、嫌です。自分で見もしない、考えもしないで、女がほんとうに生き

ノリコ　てるって言えるんでしょうか？

安生 — 言えるんでしよう。こう考えれば楽らくですからね。全部の責任は男おとこさある。今度の戦争のように。

ノリコ そんなの違います。……違うと思います。私は、責任なら、女にもやっぱりあると思います。この世には、男と女しかいないんです。だったら責任の半分だって女にないとおかしいじゃないですか。

(笑う)

安生 何がおかしいんです？

ノリコ 話しててないですが？自分の考え。そんだごと学校の教師は言いませ

ん。第一、世の中の女の人も、どれだけの人がそう思ってたが。

——はあ、

安生 おれは、たどえ結婚しても、妻さはひとりの人間どして成長していつて欲しいんです。妻自身の人生を生ぎで欲しい。その上で、共に歩きたい。

ノリコ 私も、たとえ結婚したって、自分の人生は自分で生きたいんです。誰のせいにも——夫のせいにもしたくないです。

おれだちは——その……いい相棒さなられると思いませんか？

口先だけで言ってるんじゃないですか？

(笑う) そうですね。自分で考えるんです、あなたは。

——。

どうですか？俺は。

……いいと思います。訛かたがつてるところが。

ありがとの。

安生、ノリコの手を取る。

ノリコ

ひゃっ。

ごめんの。

ノリコ・安生、新居への引越。

(壁のレインコートはこの時までになくなっていく)

紀子・典子、荷物を持ってきて、次々解いていく。

典子

これはどこ？

安生

ああ、それはそっちさ。大丈夫か。

紀子

ずいぶん重いのね。

ノリコ

本が沢山。詩集も。これ全部あなたの？

安生

ああ。適当に突っ込んでおいでくれ。あどで直すから。

ノリコ

馬鹿みたいに大きな本棚が欲しいわ——あ、

安生

いいんでねが。ほしものはほし。そうやって何が悪わる？言うだけだばタ

ダだ。

紀子

じゃあね、真っ白いブラウスが欲しい。

典子

明石の鯛が食べたい。

ノリコ
安生
紀子
典子
安生

朝日の射す台所。
外国製の立派だ木の椅子。
食卓にはジャム。何種類も。
キュッと鳴る靴。古い靴は捨てる！
蜜柑の木。

安生、苗木を持ってくる。

ノリコ

これは？

安生

トラックの隅さ積んであつた。株分けしてくれだんだの？ほれ、ご実家のお

庭の蜜柑^{みかん}。挨拶^{じざい}した時よく実つிட்ட。

ノリコ

そうよ、庭の蜜柑——小さい頃はよく登つて怒られた。私、あの樹が大好きだった。

紀子

東京の土でも根付くかしら。

典子

向こうとこつちじゃだいぶ違ふでしょう。

安生

植えてみましょで。この窓から見えつごさ。

ノリコ

でも、育つかない？、

典子

育つかない？

紀子

育つかない？

安生

二人で世話^(い)せばいい。何年掛がても根付がせようの！

三人

ええ！

ノリコ

——「ああ わたしたちが もっともつと貪婪にならないかぎり なにことも始まりはしないのだ。」

全員、のり子を見る。

ノリコ

見つかりました。……やってみたいこと。

安生

言ってみれ。

ノリコ

書いてみたい。私だけの言葉。私の考え。……もちろん、あなたのお仕事の邪魔はしません。許してくれますか？

安生

んだがら——最初から言^いてんでろ。どんどど書^(い)ぐどい。

安生、苗木を植えるにいく。

ノリコ、荷物からエンピツと紙を出し、何かを書き始める。

紀子

そうして、あんたは書き始めた。

ノリコ

押さえられなかった。書きたくて。何か書きたくて。

典子

御国のために死のうとしてた立派な軍国少女が、ひと月もしないうちケロツとして。

ノリコ

私だけじゃない、みんながそうだった！

紀子 焼け野原に夏の蚊柱みたいに沸き立った民主主義、ギブミーチョコレット民主主義、お尻を拭いた新聞紙にも民主主義。——ねえキガカリ、あんな、ホントにそんなふうに思ってたの？

ノリコ ——（顔を上げ）何が？

紀子 責任。——さっき言ってたよね。戦争、女にも責任があるって。

ノリコ ……女にまるで責任がなかったら、女は社会の中にいないも同然じゃない？……父が——そうよ、父が言ったの。女も手に職をつけて、社会の一員として自立するべきだって。

典子 さすが。お医者様は違うね。

紀子 でも、女が選挙に行けたのって戦争終わってからじゃない。それまでは余計なこと考えるな、何も言うなって。いつだって巻き込まれるだけ。

ノリコ ——、

紀子 ……結婚の約束してたのよ。どうせ帰らないなら、抱いてくれてたらよかったのに。綺麗な身体で生き残ったって、好きな男がいらないんじゃない？いやない？おかげで——そこから先は躊躇なしよ。生きてかなきゃならなかったし。

典子 どっかの誰かが始めた戦争で、あたしの旦那も帰ってこなかった——子供も、

ノリコ ……、

典子 ……空襲で逃げてる最中に。あの子を負ぶって走ってたら後ろに爆弾が落ちて……。せめて前で抱っこしてたらって何度も思ったわよ。そしたらあの子だけは助かったかもしれないのに。

ノリコ ——これでも、あたしたちに責任があるの？

紀子 それは……、

ノリコ 茨木のり子さんてさ、こう言っちゃなんだけど、恵まれすぎてんのよ。たまたまお父様が立派な方だった。旦那さんだって輪を掛けて素敵。だからそんなふうに見えるんじゃない？

ノリコ 私は——、

紀子 ……別に。キガカリのこと責めちゃいけないわよ。ただ、いいわねって。

ノリコ 違う、そうじゃない……、私は——考えなきゃって。

典子 ……考える？

ノリコ どうしてこうなったのか、何が起ころうとしていたのか。——あの時、たとえ子供でも考えることはできたはずなのに。ちゃんと見ようとも、知ろうともしなかった。情けないけど、先生や——大人の言いなりだった。人のせい？

典子 ええそう、言いなりだった、ずっと！戦争が終わってからだって、何もあんなに早く洗脳されることなかったのに。今なら思うのよ、私はもつと——

ノリコ ラジオや新聞の言いなりになるんじゃないかと、ここに確かにあった違和感を見つめるべきだったって。
綺麗事ね。

典子 綺麗事ね。

ノリコ それでも。——それだけが、あんな思いして掴んだことなのよ。今度こそ

ノリコ みんなが、男とか女とか関係ない、ここに生きてる全員が自分で考える。

ノリコ そうじゃなきゃいつかきつとまた同じ目に遭う。……だから書くのよ。世の中と自分の心をはっきり掴むために。

『いちど見たもの』(抄)

ノリコ
いちど見たものを忘れないでいよう

夏草しげる焼跡にしゃがみ
若かったわたくしは
ひとつの眼球をひろった
つめたく さわやかな！

たったひとつの獲得品
日とともに悟る

この武器はすばらしく高価についた武器

舌なめずりして私は生きよう！

保
「詩人 茨木のり子」。

ノリコ・典子・紀子、振り返る。そこには、保がいる。

保
この名前を訪ねてきた最初のお客さまだよ。——どうぞ。

川崎洋、入ってくる。

保
この人はね、川崎洋さん。

四、熱

川崎洋、三人ののり子と向かい合う。

保、安生の椅子で本を広げる。

川崎
——ええと、のり子さん？

ノリコ・典子・紀子 はい！

川崎
茨木のり子さん？

ノリコ
はい……、

川崎
——はじめまして。川崎です。お手紙を差し上げたのですが。

ノリコ
あの……？

川崎
詩学研究会に投稿されていた詩、読みました。とても良かったです。

ノリコ
——ありがとうございます。

川崎
誰が読んでも分かる言葉で、新しい価値観を出そうとされてる。僕も、まだ駆け出しではありますが、あなたと目指す部分は似てると思うんです。

ノリコ
どうです、一緒に同人誌をやりませんか？

川崎
同人誌、ですか？

ノリコ
最初は、僕とあなた、ふたりだけで。次の号からこれと思う人を誘って

いくんです。たとえば、僕らより年下だけど、谷川俊太郎。彼なんかいいと思うんですが。

谷川さん。

川崎 お読みになりましたか？『二十億光年の孤独』！——恥ずかしながら、嫉妬しました。

ノリコ でも、入ってくれるかしら？

川崎 とにかく最初の号を見て貰いましょう。それで僕たちの覚悟が分かるはずですよ。なんだったら引き摺ってでも連れてきます。

ノリコ 同人誌の名前はなんになさるの？

川崎 「權」。

ノリコ カイ？

川崎 オールです！權！

ノリコ ああ……すごくいいです。自分の手で漕いでいく。言葉の海を。

川崎 ええ。真つ暗な海です。どこまでも広い。でもあなたは、きつといい灯台にもなります。この焼け野原から躍り出た最初の女流詩人ですから。しかも美人だ。

ノリコ ……まあ。

川崎 そうと決まれば早速。のり子さんも創刊号の詩を書いてください！失礼します。

川崎、礼をして去る。

ノリコ、いそいそと鉛筆と紙を取り出す。
が、典子、横からノリコの紙を奪う。

ノリコ ——なに？

典子 書いてやるわよ。あたしも美人って言われたい！

紀子・ノリコ え、そこ？

典子 あんたはさつき考えるために書くって言った。でも、それって結局守られてるから。余裕があるから言えるんじゃない？ほんとうに苦しいときは言葉なんか出てこないわよ。

紀子 第一、詩じゃお腹は膨れないしね。

ノリコ 私だって！お金なんてなかった、けどせっかく生き残ったのよ？やっとなんか聞かしく、

典子 じゃあ聞くけど。詩でお金が稼げるって思ってた？

ノリコ ——それは、

典子 ほら。生き延びるための手段じゃないわ。

ノリコ ……、

典子 あんたの気掛かりって、詩への未練？

ノリコ ……、

典子 そんな執着、もういいじゃない？詩なんてただのお遊びよ。

ノリコ ——遊び？

典子 余裕のある人のお道楽。証明してあげる。

玄関のチャイムの音。

典子

はーい！

典子、玄関へ出て行く。

保
ノリコ

見てて。ノリちゃん。——この日、はじめて葉子さんが訪ねてきた。
え、……葉子さん？

*

庭の蜜柑の樹に光が注ぐ。

まだ花も実もついていない。

つばの広い帽子を被った美しい葉子、木漏れ日に立ち止まり、
樹を見上げる。鞆からスケッチブックを出し、デッサンする。

葉子

(樹に独り言) あんた、綺麗ね。なんの樹……？実もなるの？

葉子、絵を描き続ける。

*

一九五三年。茨木家の居間に光が入る。
階段の方から騒ぎ。

典子

大丈夫?! しっかりしてよ。

典子(のり子)、川崎洋と谷川俊太郎を迎え入れる。
川崎と谷川は酔っている。昨日から二人で飲み続けていた。
谷川、潰れかけの川崎を引き摺るように来る。

川崎

いいですか谷川さん、僕ア決意してるんだ。あんたがいいと言うまで、
分かったから、しっかり歩け。

谷川

のり子さんに約束したんです。あんたを絶対連れていく、

谷川

だからその茨木さん家だ。分かるか？

典子

川崎さん、

川崎

のり子さん？

典子

大丈夫？

川崎

……ウブ。

谷川

わー馬鹿、こらえろ。

典子

お水持ってきます！

谷川

茨木さん便所は、

典子

下です！

谷川

ああもう、行くぞ！

川崎

——。(飲み込む) 飲んだ。

谷川 汚えなー。
典子 はい、お水！

典子、台所から水を持ってくる。
谷川、川崎をソファへ寝かせ、水を飲ませる。

谷川 すいませんね。いきなりこんな、
典子 いえ……、

谷川 タクシー乗るとこまではもちっとシャツキリしてたんですが。小学校の真
裏と聞いたって助かった。

川崎 面目ない……、
典子 どうしたんです？何かあったの？

川崎 この人が頑固でいけない。見込み違いだ！
谷川 そりゃあこっちの台詞だよ。あんたが横須賀の米軍基地に勤めてるってい

川崎 うからどんなもんかと思いきや。ざまあない。
谷川 米軍基地が詩になんの関係がありますか、

川崎 ないんだろ？だからガツカリしてんじゃないか！
谷川 意味が分からん！

谷川 水でも飲んでろ！
川崎さん。私がお話するから。

典子 ハイ……。
典子 どうぞ。(谷川に) すみません。

谷川 あなたが謝る筋合いじゃない。——谷川俊太郎です。
典子 茨木のり子です。はじめまして。お噂はかねがね。

谷川 こっちこそ。……噂通りだなあ。
典子 はい？

谷川 夕べから一晩たっぷり聞かされましたからね。茨木さんは詩も端正だが、
川崎 輪を掛けてえ！

典子 川崎さん！

谷川 詩学研究会の奴らもそんな噂をしました。
典子 ……正体見たり枯れ尾花。がっかりしましたか？

谷川 ユーモアもあたりだ。
典子 その——夕べから一緒だったんですか？

谷川 昨日いきなりうちへ押しかけてきてね。『権』の同人になれつつこく
て。

川崎 どんだけお手紙出しても、あんたお返事くれないから！
谷川 返事がなけりゃNOでしょう！この人には言いましたが、僕はね、群れる

典子 っていうのがどうも性に合わないんだ。面倒なんです。
川崎 でも、あの、『権』の創刊号はお読みいただけましたか？

谷川 読みました。
川崎 反響も来てますよ！ハガキも何枚か、

川崎、鞆を探し、ハガキを見つける。

典子

谷川さんはいかがでした？

谷川

評判いいんでしょう？……僕の意見なんていい加減ですから、でも、あなたは星です。

典子

ハ？

典子

『二十億光年の孤独』——圧倒されました。純粹で。田村隆一さんが率いてらっしゃる『荒地』や『列島』の同人の方々と全く違う。思想性や主題性じゃなく、感性を信じてらっしゃる。私は、いまの詩人だと金子光晴さんを尊敬しています。あなたはまるで金子さんのような——書き方は違いますが、あんなふうによく光る、星になる方だと思いました。

谷川

(笑う)

典子

なんです、

谷川

星になるって——殺さないでくださいよ。

典子

あ、そんな意味、

谷川

あんなたちは揃いも揃って。……年下ですよ僕は。恥ずかしくないんですか？

典子

詩人に年齢は関係ありません。

谷川

……呆れるなあ。

典子

『櫂』の創刊号も呆れましたか。

谷川

そうですね……それに、夕チが悪い。

典子

……、

谷川

二人の詩が、ちんまり一遍ずつ。川崎さんの『虹』、あなたの『方言辞典』。それきりで綴じられた薄い冊子だ。

典子

ささやかでも恥ずかしくないものを出したつもりです。

谷川

でしょうね。つるつるのアート紙なんかで刷って。まるで美術作品か何かみたいじゃないですか。

典子

川崎さんと話し合って美しいものにしたいと。いけませんか？

谷川

部数は。

典子

一二〇。

谷川

それを現代詩の先生方に送りつけたわけだ。いけませんか？そりゃ、厚かましいとは思いましたけど。

典子

この人は昨日からずっとこうなんです。皮肉な顔でのらりくらり刺してはつきり言ってくれない。——先生方だって喜んでくれたんだ、(ハガキ)ほら、鮎川信夫からも感想が来てる！

典子

あなたは私たちの目標なんです。ちゃんと行ってください。じゃあはつきり言おうか。あのね——僕とあなた方じゃ種類が違う。格が違うってことですか？

谷川

そんなことじゃない。——あの同人誌、金はどうしたんです。川崎さんが多く出してくれました。

典子

この人は、亡くなったお父上の代わりに一家五人を養ってるそうですが、

典子

茨木さんはご主人はお医者だそうですね？

谷川

はい。でも家計はかつかつです。安月給で。しかも主人が医学書だの研究書だの買うものですから。

谷川

するとお二人とも乏しい家計の中から、とびきり上等な紙でたった一遍ず

典子

つの同人誌を出した？

ええ。

川崎

金のことだったら心配ありません。これからも言い出しつぺの僕が出しませから。

典子

私も。ガンバリます。

谷川

——僕はね、あんたたちの『權』を、いたましい気持ちで読んだ。あんたたちが、あんまり無垢で。

川崎

……無垢？

谷川

あんたたちはこれからきつと傷付く。

典子

——そこまでヤワじゃありません。

川崎

批判を受ける覚悟があります！だから出したんだ。

谷川

薄荷砂糖の覚悟だ、それは。

川崎

谷川さん、

谷川

僕は大学を中退した。親を納得させるために、筆一本でさつさと稼いでみせなきゃならなかった。だからなんでも書いた。書いて書いて書いて。——あんた方は僕の詩を純粹だという。でも、僕からしたら、僕とあんたたちとじゃ純粹の種類がまるで違う。

典子

……、

谷川

この人は米軍基地だって生活のため。そこに芸術家としての野望があるわけじゃない。あなたに至っては、美人でユーモアもあつてご亭主もいる。

典子

ほかに欲しいものなんてないんでしょう？

谷川

でも私は。——書きたいんです。

典子

ああ。で？

谷川

谷川さん、あなた、私より年下なら戦争中はまだ子供だったでしょう。でも私は、ちゃんと考えられる年齢だった。なのに考えなかつたんです。もう二度とそんなマネはしたくない。これは、私の一生の宿題です。だから、書くんです。

川崎

僕だって同じです。今の現代詩の世界はみんなみんな暗い。戦争で反省しきつた連中が断崖絶壁にいるような覚悟で書いてる。——でも、僕は違うと思う。詩はもつと自由なんだ。僕たちはもう誰にも邪魔されない。明るさに向かつて書いていいんだ。

谷川

参ったなア。だからそういうこと、

川崎

感受性の羽を伸ばしたいんです！

谷川

大声で言うかなア……、

典子

——谷川さん、私たちあなたみたいな才能はないかもしれないけど、

谷川

ああもういいです。うんざりだ。……茨木さん、あなたはきつといい人で

典子

常識もあるんでしょう。だからそういうことを言う。でも詩人になるのに

谷川

そんなのは邪魔だけです。

葉子、スケッチブックを抱えて入ってくる。

葉子

……終わった？

谷川

ごめん。済んだ。——とにかくそういうことですから。

川崎

谷川さん！待ってください、もう一度チャンス。

谷川 もともと今日は彼女と約束があったんです。
典子 お話聞いて余計思いました。あなたが『權』に加わってくだされば百人力
谷川 です。私たちに必要なのはあなたのような、
川崎・典子 僕には必要ない！

谷川 葉子。
葉子 なに？

谷川 僕をどう思う？

葉子 嫌い。でもあなたの書く物は、あなたよりはちよつとマシね。

谷川 ほら……僕に必要なのは、たとえばこういう女です。いつでも僕のセンチ
メントを刺激してくる。でも僕はあんた方といったって、
いいじゃない？

谷川 え？！

葉子 友達になつてつて頼んだら？頭下げて。

谷川 何言ってる、

葉子 あなたが興味あるのって結局、どうしてあなたが今ここにいるか——突き
詰めたら宇宙と自分の関係でしょう？恋だの愛だの言つたつて本当は誰も
いらぬいの。違う？

谷川 ……

葉子 でも、詩人としてのあなたは分かつてる。他人と関わる必要があるって。

谷川 そうじゃなきゃ書くのに必要な淋しさに辿り着けないから。どうせ誰かが
必要なら、この人たちがいいじゃない？

川崎・典子

葉子 『權』の同人でしょ？なるわ。この人。

谷川 葉子！

葉子 だって、枕元に置いてたわよ？

川崎・典子 えっ！？

谷川 黙れ！

葉子 嬉しそうだった。やつと話が合いそうなやつらが出てきたって。

谷川 やめろ！

葉子 私、嘘ついてる？

川崎・典子 (谷川を見つめる)

谷川 ……ああ……ああそうだよ！あんたたちと僕じゃ種類が違う。絶対的に違
う！ただ——理解は出来る。

典子 それじゃあ、

谷川 でもそれとこれとは話が別だ！あんたたちは無防備すぎるんだ。兎が狩り
場にピクニックに行くようなもんだ！

川崎 ——兎？

谷川 あんたたちと一緒になれば、僕は心のどつかで守つてやらなきゃと思うだ
ろう。この僕が、そんなこと思わせられるなんて実に許せない。あんたた
ちに誰より苛つているのは僕なのに……面倒なんだよ！

川崎 谷川さん！

谷川 ま、関係ないがな！

典子 それは……、
葉子 茨木さんは、
典子 のり子でいいです。
葉子 のり子さんはどうなの？ご結婚されてるんでしょう？

典子 はい。
葉子 やっぱりそういうお相手？
典子 うちは全然……、私の場合は詩を書くより前に結婚してましたから。
葉子 じゃあ——ボーイフレンドは？いらつしやる？

典子 主人の他にですか？
葉子 もちろん。

典子 ——川崎さん。
葉子 そうじゃなくて。あなたにインスピレーションをくれる相手。詩人も絵描きも、相手が結婚してようがお構いなしじゃない？よりどりみどりでしょ？

典子 そんな！私は。主人に悪いわ。……あなたはできるの？たとえば谷川さんがいらつしやっても、
葉子 できるわ。芸術を押し上げるのに必要なら。あの人が同じ事をして理解できる。

典子 嘘、
葉子 のり子さん。思うんだけど。あなたの詩もつと——。
典子 ……もつと、何？

葉子 ——ねえ、女でなければ書けない詩をなぜ書かないの？
谷川（声） おーい、葉子、行こうぜ！

葉子 は——い。
典子 女でなければ書けない詩って？
葉子 いいのよ、勝手なこと言つてごめんなさい。
典子 いえ……、

葉子 ねえ？お庭の樹、何かしら？
典子 蜜柑なの。植えて、もう七年も経つのにまだ花も咲かなくて。
葉子 花が咲いたら教えて？描いてみたいわ。

葉子、出て行く。

典子 あ、お送りします！

典子、追いかけていく。
保、キッチンから出てくる。淹れ直した珈琲を出す。
典子・ノリコ・紀子、玄関から戻ってくる。

ノリコ ……女でなければ書けない詩って？

紀子 あたしに聞かないでよ！茨木のり子って女が書いてるんだからそれでいいじゃないの。

ノリコ ——、

ノリコ、川崎が置いていった『權』感想ハガキに目を落とす。

ただ、あたしは……、男より女の方が怖かったけどね。

——怖い？

あたしは何にもなかったから——金になりそうなものはこれっきやなかったから、納得ずくであたしを売ってた。さっぱりしたもんよ、なけなしの金で化粧して。でもさ、すごい目で睨んでくるのはいつだって女たちなのよ。あたしを馬鹿にして蔑んで。何度怒鳴ってやろうと思っただか。——化粧したあたしより、泥だらけのあいつらの方が、心の中じゃよっぽど女だったわよ。

ノリコ、テーブルで原稿用紙に向かう。

紀子 ……キガカリ？どしたの？

ノリコ、最初の言葉を必死で探す。

典子、玄関から戻ってくる。ノリコの様子に立ち止まる。

ノリコ 「わたしが一番きれいだったとき」……、

ノリコ、解き放たれたように詩を書く。

ノリコ わたしが一番きれいだったとき

街々はがらがら崩れていつて

とんでもないとこから

青空なんかが見えたりした

わたしが一番きれいだったとき

まわりの人達が沢山死んだ

工場で 海で 名もない島で

わたしはおしゃれのきつかけを落としてしまった

紀子 わたしが一番きれいだったとき

だれもやさしい贈物を捧げてはくれなかった

男たちは拳手の札しか知らなくて

きれいな眼差だけを残り皆発っていった

典子 わたしが一番きれいだったとき

わたしの頭はからっぽで

わたしの心はかたくなで

手足ばかりが栗色に光った

ノリコ わたしが一番きれいだったとき

わたしの国は戦争で負けた

そんな馬鹿なことってあるものか
ブラウスの腕をまくり卑屈な町をのし歩いた

紀子

わたしが一番きれいだったとき
ラジオからはジャズが溢れた
禁煙を破ったときのようにくらくらしながら
わたしは異国の甘い音楽をむさぼった

典子

わたしが一番きれいだったとき
わたしはとてもふしあわせ
わたしはとてもとんちんかん
わたしはめっぼうさびしかった

ノリコ

だから決めた

ノリコたち

できれば長生きすることに
年とってから凄く美しい絵を描いた
フランスのルオー爺さんのようにね

典子

——ほらね。詩なんて綺麗なばかり。赤ちゃんをこの手で埋めて、地べた這ってた人間には、こんな綺麗な言葉浮かばない！

典子

でも、暗闇じゃないわ！

ノリコ

……は？
たとえ地べた這ってたって、そこに咲くなにげない花が綺麗だなんて思うことはある。きいちゃんを睨んできた女の人たちだって誰かに優しくしたい、されたいって健気な気持ちがあつたとある。真つ暗闇なんかじゃない、いつだって、ほんの小さな光はある……。詩はその光を書くのよ。

典子

……光？（笑おうとする）

ノリコ

二人の言うとおり、詩じゃお腹いっぱいにはならないわよ。けど、心の光を見つけて伝えていくことは詩にしかできない！——口にはできない心を言葉にすることは、そんなに意味がない？

紀子

……確かに、今の詩はちよつと好き。思ったもん、これはあたしの気持ちだつて。

典子

……どこが。ずうずうしい。

紀子

あたしだって！いつかの朝、化粧落としたら、大人しそうな可愛い子が水溜りに映ってた。ああ、あたしまだ若いんだ……そう思った。この顔を、ほんとに好きな人に見せたかつたつて。

ノリコ

そうよ。私が書きたいのは、そういうきいちゃんの、テンコさんのための詩。手の届かない芸術じゃない。キャベツやキュウリみたいに届けてくれる詩を。

階下の外塀から音。何発か石がぶつけられる。

ノリコ

何？

ついで、階下で窓ガラスが割られる音。

保 おい！——やられた！

紀子 そのこの小学生？

保 ああ。裏門からすぐだからね。いつだったかは三日連続で、
典子 あいつら〜！とつちめてやる！

典子、階下へ降り追いかけていく。

保 四月は行儀良くしてたのが、六月にはとんでもない腕白小僧になる。木登

りだけなら可愛いもんだが。

紀子 冗談じゃないわよ。学校に文句言ってる。こらあ——

紀子、出て行く。

再び外扉に石がぶつけられる。

ノリコ、自分も出て行こうと心を決める。

保 行くなが？

ノリコ ……え？

保 んでも、無事帰ってきてくれよ。

ノリコ タモツちゃん……？

窓の外、石が投げられる気配、人のうねりが迫ってくる。

「岸を倒せ」「安保反対！」などの声、歌声が聞こえる。

ノリコ、窓の外の様子に怯える。

保 六月だよ。ノリちゃん。あの季節が始まる。

デモの声、大きくなっていく。

五、六月

一九六〇年（昭和三五年）六月。

居間に入ってくる安生、勤務先の病院から帰ってくる。

外出着のコートを着ている。手には、青梅と氷砂糖の袋。

安生 ただいま。

紀子 あなた。おかえりなさい。

台所から紀子が顔を出す。夕飯の支度の途中。

紀子、安生から荷物を受け取り、コートを壁のハンガーに掛ける。

紀子 なあに、これ？

安生 駅前に農家の行商が来てでの。
紀子 梅！たくさん！

安生 故郷くにに居た頃、母親が毎年梅酒つぐ作ってで。
紀子 うちの実家も作ってたわ。子供の頃、梅のヘタ取るのを手伝ってた。懐かしい。

安生 作り方がるが？

紀子 分かるわよ！明日漬けるわ。

安生 すぐに飲めないのがな。一年は焦いぢらされる。

紀子 今年から毎年作るわよ。そしたら来年からはずっと飲める。——ゴハンの支度がまだなの。私もさつき帰ってきてきて。

安生 どうだった？本当に行ったのが？

紀子 行ったわ……。

安生、自分の木の椅子に座る。

紀子 とにかく国会を目指したの。一人でも入れるデモを探そうって。坂道に立

つてたら、最初に歌が聞こえてきた。それから地響き。大学生たちが押し寄せてきた。腕を組んで、ジグザグ行進で。

安生 全学連に混ざったのが。

紀子 私が混ざったのは「声なき声の会」。でも大学生ともスクラム組んだ。あなた以外の男と腕組んじゃった。画期的でしょ？

安生 (笑う)

紀子 凄く熱だった。人の渦。「安保反対！」「岸を倒せ！」って——警官の前も通ったのよ。

安生 んだが。

紀子 みんなみんな叫んでた。いろんな大学が旗を突き上げて。でも、よく見ると、みんなまだ幼いのよ。——考えちゃったわよ。この子たち、学徒出陣で死んでった人たちの末の弟くらいかしらって。

安生 ああ……、

紀子 やりきれないわ。あの子達の将来を守るのは、私たちの務めでしょう！

安生 んでもの、政府をどうこう言っても、その政府を選んだのは自分たちだからな。

紀子 あなた、それ本気で言ってるの？

安生 それが事実だ。残念だが。

紀子 おかしいわよ。この国の圧倒的多数は、そっちに舵を切れて思ってるっていうの？女たちに聞いてみればいい、また戦争したいかって。それでも私たちがこの政府を選んだっていうの？——大学生たちの方が、よっぽど信じられる！

安生 見せかけの熱を鵜呑みにしたらだめだア。

紀子 ……見せかけ？

安生 俺には、大学生だちも同じに思える。熱狂に煽られて麻痺して、考えることをやめていく。

紀子 違うわよ……あの子達は、

安生 彼らの顔をよぐ思い出しでみれ。一人一人が自分で考え抜いて加わってだか？仲間はずれを恐れる奴はいなかったか？借り物の言葉でがなる奴は？

紀子 けど行動の中で分かっていることはあるじゃない。大事なものは、ともかくあの場に身を置いて、体験することじゃないの？あの渦を、

安生 熱狂のための熱狂は、本質を見えなくするよ。

紀子 ——私が、デモに行ったことが気に入らないのね。

安生、オーデイオセットの曲を掛ける。

美しいモーツァルトが流れ出す。

紀子 ——けど、行かないや分らなかった……！たとえ熱狂のための熱狂でも、あの子達は真剣だった。本当に真剣だったのよ……！

安生 ……、

紀子 あの子達が何かを変えたいって気持ち、嘘じゃなかった。

安生 ……熱狂はいづか冷める。これから戦争を知らねえ世代だっただんどん増えてくる。その時に試されるんだ。この国の人間だけが何を選ぶが。

紀子 ——、
安生 あの焼け野原で、たった一ついいことがあったとすれば、たどえ一瞬でも、一人一人が必死になってこの国の未来を考えようとしたことだ。自分

のごとだけでね、みんなどうやってやり直していくか、この国全部のどこを考えようとした。……あの思いだけは信じられる。

紀子 ——、

安生 ……俺はの、希望を持ってるんだよ。

紀子 ……希望？

安生 俺だちはいづか選ぶ取る。この国の未来——今度こそ笑って過ごせる未来を。

ノリコ、安生の熱に惹かれて、入ってくる。

安生、居間に置かれた本の中から一冊を持ってくる。

紀子 ——エドガー・斯诺ウ？懐かしいわね。新婚の頃、思い出すわ。あなた、よく言ってたわね。俺たち一人一人が斯诺ウの目を持ってばいい。

安生 やっぱり、戦前のあの中国で、報道封鎖を越えて一人で毛沢東に会いに行ったのは凄いと思う。彼は、自分の目で、足で確かめだかったんだ。

紀子 ——（序文を読む）『ここ数年の間に、数方に上る生命が犠牲になっている。その真相を発見する努力以上に、一外国人の首を賭けるに足ることが

安生 あろうか。』
かえすがえすも悔しいと思う。世界で出版されでだこの本を、俺たちは戦後になってようやく読んだ。

ノリコ、ソファで原稿用紙に詩を書き始める。

ノリコ

短い生涯

とてもとても短い生涯

六十年か 七十年の

紀子

二人でよく朗読したわね。あの頃は農家の二階に間借りしてた。

安生

夕飯はうどんばかりだったの。

紀子

まだ配給だったから。

安生

きみは畑はたけを耕すのも上手がった。

紀子

勤労奉仕でさんざんやったから。感謝して。

安生

よく病院の若い看護婦わがが聞かれるんだよ。奥さまはどんな方かたですが？

紀子

なんて？

安生

足テツカイでつけ。ガサツだ。色気も――(ない)ね。

紀子

ちよっと！

安生

でも、うちではエドガー・スノウを二人で読み合える。こんな奥さん、ち

紀子

よつといないだろ？
…：ずるいわよ、そういうの。

ノリコ

世界に別れを告げる日に

ひとは一生をふりかえって

じぶんが本当に生きた日が

あまりにすくなかったことに驚くだろう

安生

腹減たの。

紀子

ゴハンの支度するわ。

紀子、梅の実などを持って台所へ。

安生、椅子に座り音楽に耳を傾ける。

ノリコ

〈本当に生きた日〉は人によって
たしかに違う

ざらりと光るダイヤのような日は
銃殺の朝であつたり
アトリエの夜であつたり
果樹園のまひるであつたり
未明のスクラムであつたりするのだ

紀子、台所から小鉢などを運んでくる。

紀子
お待たせ。

安生、うたた寝しているように見える。

紀子
もう。そんなところで寝たら風邪引くわよ。……あなた？——救急車、

紀子、電話を掛ける。

紀子
もしもし、——もしもし、救急車お願いします。主人が意識がないよう
で、——はい……はい、そうです。住所は東伏見三二二六……、ええ、
お願いします。早く来て……！

モーツァルトが響き続ける。

ノリコ、安生に。

ノリコ
——あなた、すっかりして！今、救急車が来るから。

安生、立ち上がる。ノリコを見つめ、出て行く。

ノリコ
あなた……？待って……いかないで！

ノリコ、泣く。壁に掛かったままのコートを抱く。

窓の外、庭の蜜柑の樹に風が渡る。やがて振り出す雨。

六、日記

典子、ソファでのり子の詩集を広げている。

ノリコは寝室に閉じ籠もっている。

紀子（声）
ね、見てよ。「ストロガノフバターライス添え」だって。

紀子、台所からのり子のスクラップブックを持ってくる。

紀子
トマトピューレで煮込む。牛肉を五ミリの厚さに切って貫うのがコツ。：
へえ。（ページをめくり）お、「中村屋より美味しいカレー！」大きく出

典子 たね。スパイス……十五種？！
紀子 ——楽しそうね。気にならないの？キガカリのこと。
なんでも？いつものことでしょ？やっぱり今日もここまでじゃない？

保、台所から珈琲を持ってくる。

保 まだ分かりませんよ。——（寝室に）ノリちゃん、珈琲入ったよ。
紀子 出て来ないわよ。

保、紀子と典子に珈琲を注ぐ。

紀子、飲む。

紀子 美味しい。テンコも来たら？

典子 うん……、

紀子 何よ？

典子 ねえ。思ったんだけどさ、

紀子 ん、

典子 最後にしない？

紀子 は？

典子 お芝居は今日で終わり。

紀子 終わりって——ここまでやって？茨木のり子さんの人生、頭に叩き込んだ
典子 じゃない？どうすんのよ、人助けは。

典子 ……分かんなくなっちゃって。この四ヶ月、キガカリいつもここまでじゃ
ない？閉じ籠もって泣いて泣いて、5時23分に郵便を取りに行く。そし
て眠る。その繰り返し。

紀子 そうよ。

典子 タモツちゃん。言ったよね？繰り返しから抜け出すには、キガカリ自身が
思い出さなきゃならないって。

保 ああ。

典子 じゃあ聞くけど。キガカリがそれを望んでなかったら？

保 ……望まない？

典子 ——本当ののり子さんが何を望んでたかは知らないよ。でも、キガカリの
望みはハッキリしてるじゃない！あの人、ずっとこのままでいたいだよ。

典子 ……目が覚めるたび恋をして、詩を書いて、主婦としても詩人としてもう
まくいって。旦那さんを愛したままで眠る。幸せじゃない？

保 ……、

典子 生まれ変わらなくなったって毎日新しく生き直してるのと同じだわ。

保 何が言いたいわけ？

典子 ——つまり、このままじゃダメなのかな？って。あたしたちみんな、この
先がどうなるのか分かんないけど、このまま、こうしてるのも悪くないか
なって。毎日楽しいじゃない？

保 ——待ってよ、テンコ本気？

典子 ……あんただって、キガカリを時間稼ぎの言い訳にしてたんじゃない？ホ
ントに人助けしたいんなら、横断歩道でも張ってた方がずっと効率的じゃ

紀子
典子

紀子
典子

保
典子

典子
紀子

典子
紀子

典子
紀子

典子
紀子

典子
紀子

典子
紀子

保
紀子

典子
紀子

紀子 やめてよ。交通事故をずっと待ってるって言うの？……ぜんそくの気があるのよ？あんな排気ガスいっぱいじゃ、死にやしないわよ。死んでるんだから。
典子 あたしは、早く生まれ変わりたいわよ。前を向いてるわ。次の人生じゃ何
紀子 不自由なく暮らすんだから。宝くじ当たるかもしれないし。
典子 やっすい女。
紀子 二億よ？二億が安いのか？！
典子 あんたの幸せそんなもんかって言ってるの！
紀子 幸せって？！何よ……どこが悪いのよッ！
典子 そうよ、何が幸せか分かんないからあんたも怖がってる。また立ち向かう
紀子 自信がないの。違う？
——一緒にしないで！

ノリコ、寝室から出てくる。

紀子 キガカリ……？！
——、
典子・保 ……珈琲、まだある？
ノリコ ——ああ。
保 ——ああ。
ノリコ 今、何時？
保 ——4時半になるところだよ。

保、ノリコの分の珈琲を注ぐ。

保 待ってな。今、牛乳も、

牛乳を取ってこようとするが、ノリコ、そのまま飲む。

ノリコ ——美味しい。
保 ……ノリちゃん？
典子 ねえ、キガカリ、無理しないでいいのよ、
ノリコ え？
典子 正直に答えて。——あんた、思い出したくないんじゃない？
保 テンコさん、
典子 タモツちゃんは黙ってて。この人の気持ちを聞いているの！
ノリコ ……思い出したくない、こんな辛い記憶。そう思ってたわ。でも……、
典子 ——何？
ノリコ 見つけたの。ベッドの下に落ちてて。

ノリコ、古い日記を出す。

紀子 日記？
典子 7月5日。8月6日——飛び飛びね。

ノリコ 夢日記。安生さんがいなくなつてから、あの人が夢に出てきてくれた日をつけてたの。

紀子 へえ、「8月6日、すし屋でデート。遅れて行った私に、「おそいよ」。それから学会のプログラムを見せてくれる」

典子 「9月7日、レコード聞きたい？と聞くと——うん。子供のような笑顔。」

ノリコ 三年間。回数は減つてくけど。——見て。あの人、夢でもローションとシエービングクリーム間違えてるのよ？

紀子 ふ……、(笑う)

ノリコ 私——少しずつ思い出してきて。……ねえ、タモツちゃん？

保 ん？

ノリコ 葉子さん、来てくれたのよね、あの時も……。

保 ああ。——行こう、ノリちゃん。この先へ。

庭の蜜柑の樹に光が注ぐ。

*

闘病生活の後、安生が逝つた五月。
いつかのように帽子を被つた葉子、樹を見上げる。
蜜柑の木には白い花が幾つも咲いている。
葉子、鞆からスケッチブックを出し、絵を描き始める。
そこへ、金子光晴が来る。

金子 この花は——蜜柑でしょう？いい木だな。……ここは茨木さんのお宅ですか？

七、花

一九七五年一〇月。安生の死後、五ヶ月後。
蜜柑の白い花は、大きな実となつている。
ダイニングテーブルに籠に入れられた蜜柑。
ノリコ、安生の椅子に座り、本をひろげている。
読もうとするが、すぐに物思いに耽つてしまう。
部屋は、洗濯物など片付けの途中で止まっている。
葉子、入ってくる。

葉子 こんにちは。
ノリコ 葉子さん、
ノリコ チャイム鳴らしたんだけど。
ノリコ ごめんなさい、——どうぞ入って。
葉子 久しぶりに東京へ来たものだから。
ノリコ お電話くれれば迎えに行ったのに。
葉子 大丈夫よ。こっちこそ突然来て。
ノリコ ううん、——やだわ途中で。

ノリコ、片付け途中の荷物を集め、寝室の方に持って行く。
葉子、部屋を見渡す。
安生の写真が入れられた写真立てが飾られている。

ノリコ（声） 座ってて！

葉子 ええ。

ノリコ（声） お家の方はどう？テレビでやってたわ、浅間山の紅葉。

葉子 紅葉はね、もう終わりかな。こないだ暖炉に火入れたのよ？

ノリコ（声） 暖炉？……いいわね、

葉子 のり子さんも遊びに来ない？星が綺麗よ。

ノリコ（声） うん。行ってみたい。紅葉も見たかった。

ノリコ、戻ってくる。

ノリコ ごめんなさいね。今、お茶を、

葉子 いらない、駅で飲んできた。少しは落ち着いた？

ノリコ もう五ヶ月も経つよ。かえって暢気にやってるくらい。ひとりだと気楽でいいのよ。ゴハンもお茶漬けなんかでいいじゃない？

葉子 ならいいけど……。

ノリコ どうしたの今日は？……なんか話？

葉子 描き上がったから。

葉子、鞆の中から一枚の絵を取り出す。
白い花が咲き誇る蜜柑の樹。

ノリコ うちの蜜柑？——いつ？

葉子 安生さんの告別式の後に。わたし、あの日夜になって来たでしょう？

ノリコ ずっと描いてくれたの？

葉子 真っ白い花が満開であんまり綺麗だったから。安生さん見送るみたいに。

ノリコ ……、あの時に合わせて咲いたみたいだった。

葉子 そういえばね、描いてたらお客が来たのよ。ほら、いちばん遅いお客様。

ノリコ ……金子光晴さん、

葉子 そう！金子さんたらね、朝一〇時に家を出て、七時間も歩いてらしたんですって。

ノリコ ええ？

葉子 のりさんさんのことを考えながら歩いてたら、ここのおうちが分かんなくなっちゃったんだって——一度ご自宅に戻られてもよかったのに、グルグル歩き続けて。この樹が綺麗だったから目印になったって。

ノリコ 金子さんこそお身体お悪かったのに……、
ね。

葉子 ——ありがとう。……ほんとに。すごく綺麗……、

葉子 あの花がこの蜜柑になったのね？

ノリコ そうなの。待った甲斐あって結構甘いよ。やっぱりお茶淹れるわね。

ノリコ、絵を飾り、台所に入る。

葉子 ……のり子さん？

ノリコ なあに？

葉子 ……今月の『ユリイカ』読んだわ。

ノリコ ……そう。……どうだった？

葉子 ……あれは詩人の仕事じゃないわね。

ノリコ、台所から戻る。

ノリコ (笑う) ……詩人が詩の体裁で詩の雑誌に出してるのよ。詩じゃなかったら何？

葉子 また言われるわよ。左だのなんだのレッテル貼られて。

ノリコ 「左派詩人」？あとなんだっけ、「進歩的文化人ヅラ」？……それって馬ヅ

ラみたいなもの？

葉子 のり子さん、

ノリコ らしくないじゃない。葉子さんがそんなこと気にするなんて。自慢じゃないけど私、『資本論』だって読んだことないのよ。デモに行つてたくらいで

左のお仲間に加えてもらえるなんて光栄よ。

葉子 そんな言い方、

ノリコ なんとでも言えばいいのよ。どうせなら好きなラベルを貼って貰うわ。「左翼詩人」でも「馬ヅラ詩人」でも……「詩人にあらず」でも。

葉子 それは、……逃げてるんじゃない？

ノリコ ……

葉子 今月のユリイカ、『四海波静』。あれは何？

ノリコ 思ったことを書いただけよ。

葉子 戦争責任を問われて

その人は言った

そういう言葉のアヤについて

文学方面はあまり研究していないので

お答えできかねます

思わず笑いがこみ上げて

どす黒い笑い吐血のように

噴き上げては 止り また噴きあげる

三歳の童子だって笑い出すだろう

文学研究果たさねば あばばばとも言えないとしたら

葉子・ノリコ 四つの島

えら 笑ぎに笑ぎて どよもすか

三十年に一つのとてつもないブラック・ユーモア

ノリコ

——覚えてくれてるじゃない？

葉子

直接的すぎる。これはジャーナリズムの仕事よ。

ノリコ

そのジャーナリズムがなにも言わないから——記者だけじゃない、誰も何も言わないから！

葉子

でも詩人の戦い方は違うと思う。こんな野暮な真似、

ノリコ

誰も言わないことを言葉にするのも詩人の仕事でしょ。

葉子

のり子さん、一度ラベルを貼られたら、剥がすのは簡単じゃない。大抵の人たちは大文字のラベルしか目に入らなくなる。ラベルを読んで、分類して、関係ないと思えば、もう読んでくれなくなるのよ。

ノリコ

仕方ないんじゃない？離れてもらっても結構——あの詩がいい出来じゃないのは百も承知よ。でも必要なものではあった。どんなに野暮でも！

葉子

怒りより悔しさより、あなたが訴えたかったのは、別のことでしょ？あんな書き方をしてたら、肝心の、あなたの詩が届かなくなる！

ノリコ

私の詩って何？！……そんなもの、あるんなら教えて欲しいわ。

葉子

あなたが分からなくても、わたしは、茨木のり子の詩を知ってるわ。牛飼いのせつちゃん。野菜売りの竹春さんも。

ノリコ

……誰？

葉子

浅間山に住んでるわたしのご近所。二人ともあなたの詩が好きで暗誦してる。あなただっていつか書いてたじゃない、左官屋さんが「奥さんの詩は俺にもわかるよ」って言ってくれたって。わたしがこの世でいちばん尊いと思うのは、そういう詩人よ。

ノリコ

——、

葉子

——あなたは、深いところから汲み上げた考えを、誰にでも分かる易しい言葉で書いている。観念的な言葉じゃなく、身体で、血の通った言葉で。あの怒り……怒りをそのまま書くんじゃなく、詩としてもっと違う何か、別の書き方があったはずよ。大勢の人に広く届いて、考えろ、おかしいんじゃないか？——そう気付かせる詩が。

ノリコ

……素敵ね。

葉子

のり子さん！

ノリコ

残念ながら、私、そんなたいそうな詩人じゃないわ。——怒りで我を忘れて書き殴る。この程度。笑えばいいわ。

葉子

……っ、(言いかけ)

ノリコ

考えろって言うのは簡単よ。でも、たった一人で訴え続けて、なんになるの？空回りしてるだけじゃない、

葉子

待ってよ、

ノリコ

悪いけど、あなたとは違うの。

葉子

——わたし？どうしてわたし？

ノリコ

最初に会ったときからそう。あなたの周りにはいつも——お父様も芸術家で、隣にはいつも眩しいような才能ある人たちがいて！谷川さんも田村隆一さんも、他の人だってみんなあなたを欲しがった。あなたはミュージシャンだ。——私は違うわよ！縄文人よろしく不格好に、一人で石を振り回すだけ。自分でも笑えてくるわよ無様で。もって言うって？

葉子

ノリコ

……え、
はじめてじゃない？そんな風に話してくれるの。……勘違いしないでほしいのはね。わたしの方こそ、そんなものじゃない。男の人達がなんでわたしを傍に置いたか分かる？——簡単よ。わたしに才能がないから。

ノリコ

そんなこと、
ううん、何をやっても中途半端。絵を描いても詩を作っても。望むところにはまるで届かない。私が誰かのミューズ？冗談じゃないわ。そんなものになりたくなかったし、なれもしなかったわよ！

ノリコ

……葉子さん、
ずっと苦しかったけど、最近よ、認めることにしたの。……わたしには子供向けの絵本や翻訳の仕事の方が合ってるんだって。

ノリコ

それは、
いいのよ。慰めはいらさないわ。子供向けが劣ってるってことはないんだから。

葉子

ええそう、それはもちろん——、
でもね、一步引いたからこそ分かることもあるのよ。のり子さん、あなた

葉子

前はもつと世界をめいっぱい見渡しながら書いてた。言葉の選び方、ふっくらした響き。ユーモア。——あんな言い方もある、こんな言葉も。ずっと遠くから探して。

ノリコ

——、
わたしは、のり子さんみたいな詩は書けない。男の人とだって、誰と結婚したって続かない。あなたみたいに愛する人を看取することは、きつとない。でもね——詩を愛することは別よ。あなたにも負けない。いい詩を書いてよ。のり子さん。

ノリコ、泣けてくる。

ノリコ

ダメなの……、

葉子

え？

ノリコ

——本当はもう……私……、こんな、死にたいってそんなことばかり考えてるのに？

葉子

のり子さん？

ノリコ

夜になるとね、急がなくなっちゃって思うのよ。あの人のところへ。……あの人がいる山形のお墓ね、骨壺じゃないのよ。真っ白な絹の袋に入れられて納められるの。私も早く灰になって、あの人と一緒にひとつの袋に入れてほしい……、

葉子

……バカね、あなたまですぐ来たら安生さん喜ぶと思う？

ノリコ

だから頑張ってるじゃない——私、シャンとしようって……、

葉子

——バカね……、

葉子、ノリコの背を抱く。

庭からガチャンと門扉の鳴る音。大きな木のざわめき。

葉子

何？

ノリコ また、——その小学生。

葉子 (窓を覗く) 門から木に飛び移ってる！蜜柑取りたいんじゃないの？

ノリコ 欲しかったらちゃんといいなさいって何度も言ってるのに！どうして？—

——もう嫌、とちめてやる！

葉子 のり子さん——いいから。わたしが行くから！

葉子、ノリコをなだめ、階下に降りていく。

ノリコ ウ……、

ノリコ、崩れ落ちる。肩を振わせて泣く。

保、出てくる。泣いているノリコを見つめる。

保 ——、

保、ノリコの傍らにハンカチを置いて出て行く。

やがて、葉子、戻ってくる。

葉子 のり子さん。

ノリコ ——ごめんなさい、代わりに叱って貰っちゃって……、

葉子 それがね、叱れなかった。

ノリコ え……？

葉子 蜜柑の代金、貰っちゃった。

葉子、両手いっぱい紅葉やドングリなどを渡す。

ノリコ ……何これ……、ドングリ？

葉子 このうちチャイムが門の中の玄関扉でしょう。どうしても恥ずかしかつたんだって。次から蜜柑欲しいときは、門を開けてお入りって言っておいたわ。

ノリコ ——、

葉子 見られたじゃないの？紅葉。

ノリコ ……シワくちや。

葉子 やっぱり、追いかけて叱ってこようか？

ノリコ ふ……、

ノリコ、久しぶりに笑みがこぼれてくる。葉子と笑い合う。

喜多川 あのう……、

駆け出しの日の喜多川、居間に入ってくる。

葉子 ああ！ごめんなさい。下で、この方がちょうど。

喜多川 失礼します。——ご挨拶だけ。突然申し訳ありません。青嵐舎の喜多川と

ノリコ
青嵐舎？
申します。

葉子
聞いたことないわね。出版社？

喜多川
今はまだ印刷屋です。これから新たに出版部門をはじめようとしておりまして。無理は承知で、茨木さんにご相談が、

ノリコ
……せっかくだですけど、今は、詩を書くことは、
分かっております。——ゆくゆくは是非お願いしたいですが、今日のところは別のお願いなんです。これ、企画書です。

喜多川、企画書を出す。

喜多川
茨木さんに詩の案内人になっていただけたらと。

葉子
案内人？

喜多川
これまでの詩は、難しかったり観念的だったり、一般の人には閉ざされた印象がありました。ですが茨木さんの詩は、誰にでも開かれている。そういう茨木さんでしたら、詩の世界を分かりやすく教えてくださると思うんです。茨木さんご自身が好きだと思われる詩をご紹介いただけないでしょうか。

ノリコ
……私の好きな詩を？

喜多川
誰の何を選んでいただいても構いません。どうしてもそれが素敵なのか、ご紹介いただきたいんです。それなら若い人でも詩の世界にヒラリと入っていけると思っています。

葉子
——面白そうじゃない？ねえ？

ノリコ
……、

喜多川
僕はそういう本が世の中に必要だと思うんです。ご無理なさらさず、どんなにゆっくりでも構いません。どうかご検討いただけましたら。

ノリコ
(企画書を手取る)

喜多川
——お邪魔をして申し訳ありませんでした。では、失礼いたします。

ノリコ
……あの、

喜多川
はい？！

ノリコ
ありがとうございます。考えてみます。

喜多川
はい、どうか。よろしくお願いします！

喜多川、ノリコと葉子に会釈して居間を出て行く。

が、舞い上がりすぎて階段で転ぶ。「デッ。イテッ！」。

ノリコと葉子、階段を覗きに行くが、

喜多川 (声)
大丈夫です！まったく痛くありません。失礼します！

ノリコと葉子、思わず吹き出す。しばし二人で笑う。

ノリコ
……読み直さなきゃならないわね。今のわたしを作ってくれた詩。

葉子
わたしのも選んでくださいます？

ノリコ
もちろん。アランブラ宮殿の女王様。「わたしは迷うことが好きだ」、

ノリコ・葉子 「出口から入って入り口をさがすことも」。
葉子 迷ってばかりだけだね。——金子さんの詩も入るわね？
ノリコ もちろん。金子さん、詩人の先輩として、いろんなこと教えてくれた。

「僕らの仕事は視ている、ただじっと視ていることだ」……って。視てるだけなのに、難しいわね。

葉子 「そんな瞳^めがあちらこちらで光っていなければ」、

葉子・ノリコ 「この世は漆黒の闇」。

ノリコ そういえば、金子さん、あの夜言ってくれたのよ——今は八方ふさがりに思うでしょうが、こんなことは何でもないのって。どんなに八方ふさがりでもちゃんと生きていける。人間、なんかしら美德があれば共同体が助けられます。

葉子 共同体。金子さんが？いちばんフラフラしてたの誰よ。

ノリコ ほんと。(笑う)

葉子 難しい宿題、置いてつてくれたわ、ほんと。

ノリコ あんな賑やかな人まで逝^しっちゃったんだから、向こうはきっと楽しんでるわね。

葉子 そうよ。腹が立つほどね。

ノリコ ——ありがとう。葉子さん。

葉子 じゃあ、またね。

葉子、帰り支度をする。

葉子 ここでいいわ。じゃあね。

葉子、出て行く。

ノリコ、花の絵を見つめる。安生の写真の脇に飾る。

ドングリや紅葉を片付け戻ってくると、ふと誰かの気配。

ノリコ ……あなた？

そこには誰もいない。

ノリコ ——、

ノリコ、安生の椅子に触れる。

確かに在る安生の気配を感じながら、原稿用紙を取り出し、詩を書き始める……。

八、『寄りかからず』

夕方が近づく居間。紀子と典子、本を広げている。

紀子 これが、その時の本？

ノリコ そう。いろんな人の詩を選ばせてもらって。

紀子 あ——谷川さん。川崎さんのも。

ノリコ 一年くらいかな——没頭させて貰った。今の私を作ってくれた宝物を一つ

ずつ集めて。この先、一人でも立ち向かってく勇氣が出るように。

典子 立ち向かってく……？——たった一人残されて、どれだけ生きるか分からないの？

テレンコ、

あたしはもう、そんなの嫌……、

……あなた、もしかして本当に消えたいの……？

消える？

紀子 魂も存在も。この世界から消え去りたいの？ねえ？

典子 ——悪い？……だって。疲れちゃったのよ、もう……。何のためにあたしがいるんだろうって。

紀子 ちよつと。……暗いわよ？！なに疲れてんの？！あたしたち、せつかく死んでリセットしたのに！

典子 でも生まれ変わっても時代が悪かったらアウトじゃない。この手で、守りたい命も殺してしまう。けど、あたしたちに何が出来た？そういう時代を作ったのは、あたしたちじゃない。理不尽じゃないの！？

紀子 そういう時はあれよ、その回はもうしようがないっていうか。腹括ってやり過ぎすしかないっていうか。

典子 そんなこと言ってるから、あんたヤモリになっちゃったんじゃない？悪いことして。

紀子 ——あつ。そうなのか。

典子 もうあたし何のために生まれるのか分かんない……、人間をやり過ぎたのかもしれないね。人間なんて、本当どうしようもない……、

ノリコ

典子

……あたしだって前向きたいわよ。でも生まれたら、また取り残されるの。あんただって分かるでしょう？一緒に生きた喜びより、取り残される哀しみの方が強いって！

ノリコ ——その本のね、最後に選んだ詩。

紀子、ページを開く。

……永瀬清子って人の詩？

ノリコ そう。——『悲しめる友よ』

典子、紀子、ノリコが開く本を覗き込む。

ノリコ

「悲しめる友よ 女性は男性よりさきに死んではいけない。」

紀子 「男性がひとりあとへ残ったならば誰が十字架からおろし埋葬するであろうか。聖書にあるとおり女性はその時必要であり、それが女性の大きな仕事だから」

典子 「あとへ残って悲しむ女性は、女性の本当の仕事をしているのだ。」

紀子 うえく。

典子 ——なによこれ。……男に都合良いだけじゃない。

ノリコ でも、そう考えれば救われることもあるわよ。あの人がいなくなつて、私も死にたかつた。だけどそうしたら本当に、あの人が消えてしまうのよ。あの人の考え、教えてくれたことを何一つ果たせなくなる。

典子 そのために踏みとどまつたつて言うの？

ノリコ あの人が言ったから。未来に希望を持つてる……つて。何年掛かるかわからないけど、私が生きた分だけは先の人にバトンを渡せる。

典子 バカじゃない？——どこまでお人好しの、

ノリコ ——そう思つたら一人でも一人じゃないのよ。それに……思い出したのよ。生まれてきて良かったつて——一生ここに刻もうつて思つた記憶。

紀子 へえ、どんな？

ノリコ あの人と結婚して、急な用事があつてね、あの人の実家に一緒に行った。

紀子 確か山形の？

ノリコ 鶴岡。真冬でね、駅についたとき、バスも車も見当たらず。あの人が犬橋を見つけてきてくれた。——雪の道を、わたしだけを橋に乗せてあの人は走つた。もう夜で、どこの家もシンとして、月だけが蒼く光つてた。

一面の銀世界。橋を引く犬の息づかい。御者の黒い影。それから、私の隣をひたすら走るあの人の横顔。息が切れて、それでも走り続けて。その時思つたの。私、生まれてきてよかったつて。

ノリコ ……ノロケて。

紀子 (笑う)

ノリコ 言つとくけど、あたしにもあるから。あんたなんかメじゃない、生まれてきて良かった——つて記憶。……テンコは？なかった？

テンコ ……。

紀子 テンコ、生まれる意味はきつとあるわよ。——テンコの赤ちゃんだつて、たとえ短くても、この世に生きた意味はきつとある。あんたがその子のことをずつと忘れずにいるように、今だつてきつと誰かがあんたを覚えてくれてるわよ。

典子 ……。

典子、涙ぐむ。

ノリコ、台所へ向かう。

ビンに詰めた自家製梅酒を掲げる。かつて安生と漬けたもの。

ノリコ 飲もう。

紀子 ちよつと何？ 梅酒……？！

ノリコと紀子、手分けしてグラスなどを出す。

紀子 これ、あの時旦那さんが買ってきた？

ノリコ ん。

紀子 いい色出てるわねー。何年物？

ノリコ 三一年！——あの人が亡くなった年に漬けて、それから十年は辛くて触れなかつたの。十年経つてやつと、あの人の誕生日に開けたの。

紀子 そりやまた。——長かったね。
ノリコ でもあつという間だった！あの人がいなくなつてから、韓国語を習いだし
てね、

紀子 韓国語？なによ、韓流ブーム？
ノリコ 違うわよ、その前！……ずっと考えててね、残された私に何が出来るんだ
ろうって。そういう時に韓国の女流詩人の方と会う機会があつたの。私の
詩を読んでくれてて日本語も達者で。思わず「日本語がお上手ですね」つ
て言ったら「学生時代はずっと日本語教育されたもの」って。

紀子 ああ……、
ノリコ 私ね、頭ではちゃんと知ってたはずなのに。急に恥ずかしくなつてね。：
：私は、韓国語の彼女の詩が読めない。隣の国の人たちの本当の痛みを知
らない。だったら今度はこちらが彼女の言葉を学ぼうって。隣の国の詩を
日本語に翻訳して伝えようって。

典子 ……なるほどねえ。そういう、
ノリコ なに？
典子 茨木のり子ってほんと、敵に回したら面倒ね。
ノリコ どういう意味？
紀子 いいじゃない、ほら。乾杯！

三人、梅酒のグラスを合わせる。

三人 く〜！
典子 前の時代で失敗しても、挽回の機会はあるね。こういう面倒臭い人がいる
限り。
ノリコ みんなでバトンを繋いでね。
紀子 まあでも、不思議よね。女ひとり生き残つた方が、なんでかさまになるも
んね。

『寄りかからず』

ノリコ もはや
できあいの思想には寄りかかりたくない
もはや
紀子 できあいの宗教には寄りかかりたくない
もはや
典子 できあいの学問には寄りかかりたくない
もはや
ノリコ いかなる権威にも寄りかかりたくはない
ながく生きて
心底学んだのはそれぐらい
じぶんの耳目
紀子 じぶんの二本足のみで立っていて
なに不都合のことやある

ノリコ、安生の椅子に歩いていく。

ノリコ

倚りかかるとすれば
それは
椅子の背もたれだけ

遙か頭上から時を告げる響き。

窓の外の蜜柑の樹が大きく風にざわめく。

保、居間に現れる。

保

5時23分。時間だ、ノリちゃん。

ノリコ、すつくと立つ。書斎へ向かっていく。

紀子

玄関じゃない、……郵便を取りに行くんじゃないわよ！

典子

抜け出せたのね！

ノリコ、書斎へ消える。

書斎から、浩二と喜多川の大きな声上がる。

浩二（声）

これッ、喜多川さん、これなんですかね？

喜多川（声）

なんか見つけたか？（間）——わーッ、

九、『Y』

部屋は元の二〇〇六年六月の午後。

保・紀子・典子・ノリコ、書斎の様子を見守っている。

喜多川・保・葉子、リビングテーブルに置かれた茶色の箱を囲

み、中の原稿を読んでいる。

浩二

……これって、

喜多川

ああ……。いけませんよ……。 （涙ぐむ） 今までのと違いすぎる……！

浩二

はい……。

葉子

（箱の蓋を見る）「Y」——、

浩二

伯父さんのイニシャルですね。安生の「Y」。

喜多川

——浩二くん、これはいけないよ。世に出したら——これまでののり子さ

んのイメージが……、

浩二

それでも伯母は。——見てください、ここに。

葉子

……目次ね。

浩二

どの詩をどの順番で配置するか……伯母はちゃんと考えてる。原稿の分量

も十分ありませんか？詩集一冊分は……、

葉子

十分過ぎるわ。

浩二

喜多川さんの言った通りでしたね。——原稿はあったんだ。

喜多川

——自分がオサラバしてから世に出す。のり子さん確信犯だな。誰のどん

葉子
な批判もいただきたくはありませんって。
良かったら、先に少しだけ読ませていただけないかしら。ほんの少し。わたし、もう帰りますから。
浩二 どうぞ。読んでやってください。——なんだろう、底に何か。

浩二、箱の底から骨の欠片を取り出す。

喜多川 ……なんだい？——骨？

浩二 第二頸椎ですね。よく言う喉仏です。

喜多川 ご主人の……？

浩二 ……伯母は、これだけはずっと離さずに、傍に置いてたんですね。埋葬してやらないと。

葉子 袋、

浩二 ——え？

葉子 ずっと前のり子さんが言ってたのよ。浩二さん、安生さんの方のお墓は、骨壺じゃなくて白い袋に入れるんでしょう？

浩二 ええ。

葉子 のり子さんね、安生さんと一つの袋に入れてほしいって。

浩二 本当ですか？

葉子 ええ。確かに聞いた。——お願い。この骨も、同じ袋に入れてあげて。のり子さんと一緒に。

浩二 分かりました。

浩二、骨をダイニングテーブルに置く。

葉子、箱の中の原稿を手に取る。

喜多川 ……浩二くん。少し散歩しよう。

浩二 え？でも、

喜多川 その伏見稲荷、お詣りしてこよう。

浩二 ——（原稿を読み出した葉子に気付く）そうですね、

喜多川・浩二、居間を出て行く。

葉子、原稿を読んでいる。

ノリコ、骨をそつと手に取る。

ノリコ 葉子さん。ありがとう。置いてくわけにはいかななくて。

典子 待ってたわけね、あんたは。葉子さんがここへ来るのを。

紀子 何？あたしたちの努力は虚しかったってこと？

ノリコ ううん。きいちゃん。テンコさん。二人ともありがとう。

紀子 うん！

典子 あんた、もうキガカリじゃなくなっちゃったわね。

ノリコ ン。タモツちゃんも。傍にいてくれて。

保 ああ。

葉子

『恋唄』

肉体をうしなつて

あなたは一層 あなたになつた

純粹の原酒モルトになつて

一層わたしを酔わしめる

恋に肉体は不要なかもしれない

けれど今 恋わたるこのなつかしさは

肉体を通してしか

ついに得られなかったもの

どれほど多くのひとびとが

潜つて行ったことでしょう

かかる矛盾の門を

惑乱し 涙し

葉子

のり子さん。この詩は全部恋文ね。——女にしか書けない……あなたにしか書けない……。

葉子、原稿を箱の中に戻す。帰り支度をする。

葉子

わたしも、あと少しやってみるわ。——またね。のり子さん。

葉子、居間を出て行く。

紀子

ノリコ

……行っちゃったね。

うん。

ちよつと聞いてた?! さつきありがとうつて言われたわよ!

誰に言つてんの?

わかんないけど、上の人? ——どうする? これでもう観念する?

そうねえ……あなたは?

あたしは——まだいいわよ……シヤネル行きたいし。

ハ?

今年の新作見てもからじゃないと。

あなた、煩惱ありまくりね。次はコガネムシじゃないの?

コガネムシってどんな虫よ。

知らないわよ。

紀子

典子

まあでも、コガネムシだろうが、次に世の中が理不尽になつたら、嫌だつて叫ぶけどね。コガネムシなりに。

あたしだって、なんにせよ、次は、もうちつとまじな生き方してやるわ。

紀子

その意気その意気。

保 では、お別れですね。テノコさん。きいちゃん。ノリちゃん。どうかお元気で。
典子 うん。元気で生まれ変わってやるわ。
紀子 珈琲ご馳走様。美味しかった。
ノリコ ——タモツちゃんは？……タモツちゃんはどうするの？
保 残念だけど一緒にはいけない。——さ、行ってください。
ノリコ タモツちゃん、
紀子 また来るわね！
保 うん。
典子 じゃあね！
保 うん。
ノリコ 本当にありがとう！……元気で！
保 うん。

ノリコは玄関へ、紀子は食器棚へ消えていく。
窓枠を乗り越えようとして典子、二人がいけないのに気付く。

典子 ちよつと。普通、みんなと同じところから出てかない？——もうっ。

典子、出て行く。

十、『対話』

保、ひとり部屋に残される。
原稿を整え、骨を元通り箱の中に納める。
保、安生の椅子に座る。静けさが降り積もってくる。

保 ——、（泣けてくる）

書斎から、ノリコが現れる。

保 ノリちゃん？！……どうして。
ノリコ もうひとつ忘れ物。大切なことを思い出したのよ。あなたが誰か。
保 ……、
ノリコ 子供の頃からずっと傍にいてくれた。——私の樹。蜜柑の樹。この家をずっと守ってくれたのね。ありがとう。
保 ……お礼を言うのはこっちだよ。あなたがこの世に生まれてきて、俺に名前をつけてくれた。はじめて書いた詩を捧げてくれた。あの時に、俺の生命も動き出したんだ。

『対話』

ノリコ ネーブルの樹の下にたたずんでいると
保 白い花々が烈しく匂い

獅子座の首星が大きくまたいた
つめたい若者のように呼応して

ノリコ・保
地と天のふしぎな意志の交歓を見た！
たばしる戦慄の美しさ！

ノリコ
のけ者にされた少女は防空頭巾を
かぶっていた 隣村のサイレンが
まだ鳴っていた

保
あれほど深い妬みはそののちも訪れない
対話の習性はあの夜幕を切った。

ノリコと保、笑い合う。

ノリコ
——あなたを、残していつてしまいわね。私がいなくなったら、誰が蜜柑
をもいでくれるかしら。

保
そんなこと。なるようになります。鳥に食われても風にさらわれてもい
い。枝を伸ばして、学校帰りの子供たちに好きなだけ取ってもらっても。

ノリコ
そうね……、

保
それに、あなたが詩をくれたおかげで、今じゃ俺も空想が出来る。

ノリコ

保
いつか、あなたがもう一度この世界に生まれてきて、その小学校に通う

ノリコ
かもしれない。小さなあなたとまた会えるかもしれない。そんな夢を。

保
私、あなたを憶えていられるかしら？

ノリコ
大丈夫。のり子さんが忘れてしまっても、俺の方じゃ分かりますから。ず
っとずっと憶えてますから。

窓の外が明るくなる。玄関の方から光が差ししてくる。

ノリコ、誰かに呼ばれたかのように顔を上げる。

ノリコ
——あなた？

目には見えないが、その存在をはっきりと感じるノリコ。
安生が残したレインコートをさつと羽織る。

ノリコ
忘れ物よ。待ったでしょう？

ノリコ、光の中へ出ていく。

保
のり子さん。幸せに。

ノリコが去り、すべての光が消えていく。
窓の外は、おだやかな夕暮れの時を迎える。

夕方のチャイムが、グラウンドで遊ぶ子供たちの声が風に
乗って聞こえてくる。

窓辺の蜜柑の樹に歩み寄る保、これから始まる長い時を想う。

保

さあ。——立ち向かっていこうか。

蜜柑の樹が、風の中で輝く。

〈了〉